

Heimat

第 60 号・記念号

2022 (令和 4) 9 月発行



草津温泉湯畑 Kusatsu Heiwa Onsen

ハイマート
Heimat

ぐんま日独協会 会報



関 孝和



Isaac Newton



Gottfried Wilhelm Leibniz

ぐんま日独協会
JDG Gunma

Heimat 第60号 記念号

2022（令和4）年9月発行

目次

| | | | |
|--------------------------|--|------------------|----|
| 【巻頭言】 | ハイマート 60号発行を記念して ・・・日独交流の原点は明治初めの岩倉使節団・・・ | 会長 鈴木 克彬 | 2 |
| 【ドイツ大使群馬県訪問の記】 | | | |
| | ドイツ大使群馬県訪問 総まとめ | 鈴木 克彬 | 3 |
| 【共愛プロジェクト】 | | | |
| | 共愛プロジェクト報告 | 共愛プロジェクトチーム 岡 博子 | 9 |
| 【ぐんま日独協会初代会長：故平形義人さんのこと】 | | | |
| | 海軍軍医だったころ | | 13 |
| | 故平形先生の思い出 | 鈴木 喜代 | 14 |
| | 故平形義人名誉会長の思い出 | 堀口 靖之 | 15 |
| 【日独姉妹都市】 | | | |
| | 沼田市と国際姉妹都市フュッセン市について | 金井 康夫 | 16 |
| | 沼田市・フュッセン市姉妹都市提携 10周年記念式典参加の 懐かしい思い出 | 川田正彦・正江 | 17 |
| 【研修記事】 | | | |
| | <表紙の解説> <i>Heimat</i> のロゴ、草津湯畑、和算の大家『算聖之碑』 | | 18 |
| | 群馬に縁りの「和算の大家 関孝和」と日・独・英「世界三大数学者」 | 長井 宏之 | 19 |
| | ルートヴィッヒ II とリヒャルト・ワーグナー | 平方 秋夫 | 20 |
| | 「カール・オルフの教育」ドイツ人作曲家 | 瓜生 郷子 | 21 |
| 【会員寄稿】 | | | 22 |
| 【ぐんま日独協会】 | | | 49 |
| | ぐんま日独協会の概要 | | 49 |
| | 沿革 | | 49 |
| | 会則 | | 50 |
| | ぐんま日独協会の位置付けと組織 | | 51 |
| | ぐんま日独協会 | | |
| | 2022～2023 年度役員（2022 年 4 月改定） | | 52 |
| | 2020～2021 年度役員（2020 年 4 月改定） | | 52 |
| 【活動の様子】 | | | 53 |
| 【Heimat 既刊号から】 | | | 57 |
| 【入会案内】 | | | 59 |
| 【編集後記】 | | 長井 宏之 | 60 |
| 【問い合わせ先・参照先】 | | | 62 |
| | URL QR コード | | |

巻頭言**ハイマート 60 号発行を記念して****・・・日独交流の原点は明治初めの岩倉使節団・・・****A 歴代のハイマート発行担当者へ感謝**

ぐんま日独協会は1987年(昭和62年)、“ドイツ好き集まれ”の掛け声のもと、誕生した会です。生まれてから30年程の会ですから、ハイマートは平均年2回発行されていたこととなります。その継続の中には並々ならぬご苦労の時期もあった事と思われまます。

改めて関係された方々への敬意と感謝の気持ちを捧げます。

**会長 鈴木 克彬****B 明治以降、日本の交流は、何故イギリスやフランスでなく、ドイツが多くなったのか・・・**

江戸時代の末期、徳川幕府はフランスと交流、諸技術を学びました。一方薩長は幕府には内密でイギリスへ留学生を送るなど交流が有りました。しかしドイツは1861年、オイレンブルク伯の使節団が見ただけで殆ど交流は有りませんでした。それが明治時代となると、政府・民間の欧米との交流はドイツが中心となります。何故か・・・それは岩倉使節団に起因していると思われまます。

C 岩倉使節団の誕生と役割

新政府が誕生してから4年、明治政府は新政府のアドバイザーであったフルベッキ氏の提言を受け、新国家の基本姿勢づくりを求めて、欧米諸国への使節団を派遣することを決めました。

メンバーは岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文等々新政府の中心人物46名で、明治4年の暮出発しました。使節団の行先はアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、ドイツ(当時はプロシヤ)等々と1年9か月の長旅で、欧米各国の政治体制・国民性等徹底的に調べました。その結果、天皇を柱とした中央集権の官僚国家を目指す日本には、ドイツの当時のビスマルク宰相の政治を模範とすることが最適と判断し、帰国後、ドイツ型の富国強兵・殖産興業の道を進めることとなったのです。その為、以降お雇い外国人もドイツ人が増え、また明治政府・民間が派遣する留学生もドイツ行きが多くなり、日独交流が濃密になっていったのです。

一方ドイツ側から見ても、日本の留学生は、勤勉・熱心且つ文化レベルも高いと評価され、医学・音楽を含め、益々幅広い日独交流が深まっていきました。

そして今後、共に自然環境を大切に、且つ高度な科学技術向上を目指し、相互交流・相互学習の道を歩んでいきたいと念じています。

D 注記

当岩倉使節団の詳細は、平成25年(2013年)のぐんま日独協会主催の『第5回ドイツフェスティバル in ぐんま』のパネル展で、県民の皆様にご紹介しました。

詳細はぐんま日独協会のホームページでご覧になることが出来ます。

以上

ドイツ大使 Dr. クレーメンス・フォン・ゲッツェ閣下の群馬県訪問

会長 鈴木 克彬

ドイツ大使館のゲッツェ大使を含む4名の方が、5月11日と12日、大使館公用車にて群馬県に来県されましたのでその概要を報告します。

◎スケジュールは次の通りです。

日 程 2022 (令和4) 年5月11日(水)・12日(木)の2日間

訪問先 群馬県内各地 (特にドイツと関わりのある所)

来訪者 1. ドイツ大使 Dr. クレーメンス・フォン・ゲッツェ閣下
2. 大使夫人ソニア氏
3. 通訳 ハシュケ・ステファニー暁子氏
4. ドイツ大使館文化課長 シュトルツェンベルク氏
5. 運転手

目 的 1. 日独交流160周年を記念して制作されたタウト関連のビデオの舞台少林山達磨寺の訪問とブルーノ・タウトの研究・関係者との懇談
2. 群馬県内でドイツと関係ある市町村と群馬県庁・前橋市役所への表敬訪問
3. ぐんま日独協会関係者との懇親・懇談

行 程 すべて大使館公用車使用 (当初の計画案)

5月11日(水)

東京…草津町長表敬訪問……ベルツ記念館見学……昼食…

早朝出発 10:00 10:30 11:00 11:30 11:45 12:30

……沼田市長表敬訪問……吹割の滝見学…ホテルサンダーソン着 …

14:00 14:30 15:15 16:00 17:00

…同ホテルにて懇親会 ※同ホテルにて宿泊

18:00 19:30

5月12日(木)

ホテルサンダーソン……前橋市長表敬訪問……群馬県知事表敬訪問……高崎少林山達磨寺へ…

9:00 9:30 10:00 10:30 11:00 11:10 11:50

…簡単な昼食……本堂にてビデオ鑑賞……タウト関連関係者の紹介・説明・懇談…

12:00 13:00 13:30 14:00 14:00 15:00

…少林山達磨寺洗心亭等見学……東京へ

15:00 16:00 16:30



◎訪問者と参加者

草津町役場及び沼田市役所訪問者氏名

ドイツ大使館関係訪問者 上記記載3名 (大使夫人及び運転手除く)

ぐんま日独協会関係者 会長鈴木克彬 同夫人和子
副会長中澤敬 事務局長平方秋夫
11日昼食会のみ参加 ぐんま日独協会理事 孀恋村村長
熊川栄。



前橋市役所及び群馬県庁訪問者氏名

ドイツ大使館関係 訪問者は上記に記載、大使夫人を含
め4名

ぐんま日独協会 会長鈴木克彬 同夫人和子 副会長
田口久美子 事務局長平方秋夫



夕食懇親会参加者

ドイツ大使館 同夫人を含め4名。

ぐんま日独協会 鈴木克彬 鈴木和子 平方秋夫
事務局次長 井上晃良 企画担当執行理事 瓜生郷子



少林山達磨寺でのビデオ鑑賞懇談会出席者

ドイツ大使館 大使を含め4名

ぐんま日独協会 鈴木会長夫妻 平方事務局長
広報担当執行理事 岡博子 理事 広瀬正史

◎突然の変更事項が発生

1. 5月11日(水)

大使夫人が突然東京での用事が発生し、大使館の車
での来県が不可能となり、新幹線高崎駅着16時38分
の変更となった。当件は急遽井上事務局次長に連絡、高崎駅での大使夫人お迎えを依頼し解決した。

2. 5月11日の早朝、関越自動車道鶴ヶ島インター付近でトラックの火災事故があり、大使館の車が 3時間程遅れる事態が発生した。そのため草津町役場、沼田市役所と急遽連絡を取り、訪問時間の 調整をお願いする事態となった。

◎個々の会話等について

A. 草津町黒岩信忠町長表敬訪問は、調整後13時から開始

1. ベルツ記念館が建設され、観光拠点として草津の目玉になっている。
2. コロナ禍で中断しているが、姉妹都市提携を締結しているベルツ博士の生誕地ビーティヒハイム・ビッシンゲン市と定期的に児童生徒の相互訪問を行っている。
3. 改めてベルツ博士の医学上の功績をゲッツェ大使も再確認されたと
思われる。
4. 草津町役場で、西の河原にあるベルツ博士とスクリバ博士の胸像宛
の献花を2基用意してくださった。大使と課長が献花。
5. 草津町は道路が狭く車での移動は難しいため、草津町の車で誘導し
ていただいた。



B. 沼田市星野新市長との面談

1. 約束の時間(14時)から2時間程遅れ、時間調整に迷惑をかけたと思われる。
2. ロマンチック街道の関係で、フュッセン市と姉妹都市提携を行っている。
3. 今回のオリンピックではドイツのフェンシングチームが事前合宿、そのお礼。
4. 星野稔市長は就任直後であり、挨拶が中心となった。
5. 沼田市職員から、吹割の滝鑑賞を薦められ、市職員の案内で滝を見学。水量が多く、大使館の皆さんに大変喜ばれた。

C. 前橋市山本龍市長との面談等

山本市長から大使あてに次の3つの要望があった。

1. 前橋市立の前橋工科大学に、ドイツ人を講師・教授として招く方法を検討したい。
2. 環境特にドイツの森林対策について学びたい。
3. ドイツでは温泉治療に保険が適用されると聞いている。細部を知りたい。



D. 群馬県山本一太知事との面談

1. 知事は群馬県のイメージアップを図ることを最優先としたい。
2. ドイツから観光客を迎えることは、どうすれば可能か
3. 山本知事がドイツ大使館を訪問したい、諸々お話し合いをしたいと要望した。ゲッツェ大使「どうぞお出かけ下さい」と回答。



E. 大使館側とぐんま日独協会側との懇親会 (於 ホテルサンダーソン7階中華菜々久)

出席者は双方合わせて9名。講演会はコロナ禍を配慮し中止。

1. 紹介挨拶等から始まり、ぐんま日独協会の行事等を、30年記念誌・フェスティバル等のチラシ等で説明。
2. 大使から「日本はこんなに森林があるのに、何故木材を輸入するのか」と質問あり。
3. 自然な流れで、9名が5名と4名に別れ、夕食を取りながら約90分間の有意義な懇談が出来た。



F. その他、今回の大使ご来県に対して苦慮したこと

1. 宿泊のホテルは、赤城・利根川の景観優先とし、ホテルサンダーソンに決定。
2. 11日(水)の昼食。夜の講演会・懇親会の形式と会場。
 - (1) 昼食は時間節約を優先して八ツ場ダム「道の駅八ツ場ふるさと館」事務所2階で。
 - (2) 夕食・懇親会は、ホテルサンダーソン7階、赤城山・利根川の景観優先。
3. 諸々の集りの出席・参加者
4. 費用負担

G. 感謝

1. 訪問したすべてのところでは、ドイツ国旗が用意されており、多くの配慮に感謝。
2. 時間調整への対応、お出迎え等々、県・市町村側の協力に心から感謝したい。

◎ベルツ博士、ブルーノ・タウトに関する説明・紹介は、別途、機会を見ていきたい。

ドイツ大使からの礼状（ドイツ語）



Botschaft
der Bundesrepublik Deutschland
Tokyo

4-5-10 Minami-Azabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047

Herrn
Katsuaki Suzuki
2445-219, Ishii, Fujimi-machi
Maebashi-shi, Gunma
371-0105 Japan

Dr. Clemens von Goetze
Botschafter der Bundesrepublik Deutschland

Tokyo, 23. Mai 2022

Sehr geehrter Herr Suzuki,

für die Vorbereitung und Organisation im Rahmen meiner Dienstreise nach Gunma am 11. und 12. Mai möchte ich Ihnen meinen herzlichen Dank aussprechen.

Aufgrund Ihrer tatkräftigen Unterstützung konnte ich mir einen nachhaltigen Eindruck über die engen Beziehungen zwischen der Präfektur Gunma und seinen Partnern in Deutschland verschaffen. Dies ist nicht nur in den Gesprächen mit Ihnen und der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Gunma, sondern allen Gesprächspartnern klar zum Ausdruck gekommen.

Besonders freut mich zu sehen, welche Früchte die Arbeit der JDG Gunma unter Ihrer Führung für die deutsch-japanischen Freundschaft getragen hat und sicherlich auch in Zukunft weiter tragen wird. Sehr gerne wird Sie die Deutsche Botschaft dabei auch weiterhin unterstützen.

Dabei wünsche ich Ihnen viel Erfolg und stets gutes Gelingen. Auf den fortgesetzten Austausch freue ich mich jedenfalls sehr.

Mit freundlichen Grüßen

ドイツ大使からの礼状（日本語訳）

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井

2445-219

ぐんま日独協会 会長

鈴木 克彬 様

東京 2022年5月23日

拝啓

去る5月11日から12日にかけてのわたくしの群馬県出張の折には、事前の準備段階からご協力いただき誠にありがとうございました。

みなさまの多大なるご尽力の御蔭をもちまして、群馬県とドイツのパートナーとの絆について見識を深めることができました。これは、鈴木会長やぐんま日独協会のみなさまとの懇談の場だけでなく、参加されたすべての方々にも明確に伝わったものと推察いたします。

とりわけ、鈴木会長をはじめ、ぐんま日独協会のみなさまの日々の活動が、日独の良好な友好関係として実を結んでいること、そして、今後も実り豊かな成果をあげていくに違いないことを伺うことができ、大きな喜びを感じております。ドイツ連邦共和国大使館といたしましては、今後も喜んで支援させていただきます。

末筆になりますが、ぐんま日独協会の益々のご成功をお祈りいたします。今後も活発な交流が続きますことを心より楽しみにしております。

敬具

駐日ドイツ連邦共和国大使

クレーメンス・フォン・ゲッツェ

少林山達磨寺

片品村 吹割の滝



共愛プロジェクト報告

共愛プロジェクトチーム 岡 博子

1. 共愛プロジェクトについて

4月の執行理事会後に下記のように会員向けに共愛プロジェクトが説明されました。

会員の皆様へ「共愛プロジェクト」についての説明

昨年は日独交流 160 周年の年にあたり、ドイツ大使館は日本全国の日独協会に対し記念行事を実施してほしい旨の通知を発信。ぐんま日独協会も第 8 回ドイツフェスティバル in ぐんまを実施する年で、その一環として次代を背負う子供たちにドイツについて知ってもらう行事を企画しようと決めました。以前からドイツ大使館主催の絵画コンテスト「わたしのドイツ」に出品してくれている共愛学園小学校が候補に挙がり、昨年度から具体的な計画がスタートしました。校長先生、教頭先生のご理解とご協力を頂き、ほぼ 1 年をかけて学校側との打ち合わせを重ねてきました。

ドイツフェスティバルは残念ながら中止と決定しましたが、「共愛プロジェクト」はドイツ大使館の大きなお力添えをいただき、継続実施することができました。

この事業実施のために共愛プロジェクトチーム(近藤前事務局長・平方事務局長・瓜生・岡)を結成し準備を始めました。途中メンバーも入れ替わりましたが(平方・瓜生・日向・宮越・岡)いつしかこのチーム名が事業そのものの名前に変遷しました。

2. 授業までの経過

- ・2021年9月の執行理事会にて大使館との交流事業を提案される。そして過去3年間、熱心に「わたしのドイツ」展に参加してくださっている共愛学園小学校に最初に声掛けをすることが決まる。
- ・共愛プロジェクトチームで話し合いを持ち、どのように進めるか目的、内容などの検討 “物知り探検!! ドイツ大使館に行ってみよう” (仮題) 企画案作成
第1回目の授業はぐんま日独協会員によるドイツの基礎知識(日独交流160年についてを含む)
第2回目を大使館と学校をWebで結び「大使館ツアー」大使館職員に授業をお願いする。
- ・10月11日共愛小教頭先生に下話をし好感触。企画案を持ち10月19日正式に学校訪問(平方・岡) 共愛学園小学校(校長先生、教頭先生)にご了解をいただく。
- ・10月26日大使館へ届ける共愛学園小学校・共愛学園資料(学校概要や学園130年史)を預かる
- ・11月11日大使館訪問、この事業への協力を依頼する。(鈴木会長・近藤前事務局長・岡)
大使館側: グレープス花さん・ハシユケ暁子さん)
- ・1月末よりハシユケ暁子さんとメールで連絡(インターネット環境や授業内容の大まかな確認。このころより専門官ホーボルトさんも参加)
大使館側も大変関心を持ってくださり順調に進めることが出来ました。
- ・2月~4月上旬 第1回目の授業者の決定。共愛学園小学校とは授業日や授業時間について調整
授業を受ける児童と同じ年頃にドイツで学校生活をした宮越リカ会員の体験をもとに児童に話していただくのがベストと考えた。(会員には経験豊かな素晴らしい方々がいるので苦慮した)
- ・4月6日少林山に大使訪問の下見にハシユケ暁子さんとホーボルト幸夫さんがお見えになり、30分ほどの時間をいただき直接打ち合わせ。(コロナの状況によりWebでなくて対面での授業や講師も2名でして下さることなどの提案いただく) 第2回目の授業日6月16日に決定

- ・4月21日共愛小学校教頭先生、5年担任の先生2名と直接お目にかかり打ち合わせ。今後の詰めは担任の先生と行うことを確認（英語教育と国際理解を並列に考えていたがこのころより国際理解教育の比重が大きくなったように感じた。また総合学習としての位置づけを明確にし、事前の調べ学習や事後の発表も考えているようだった。）
- ・5月9日第1回授業の模擬授業及び資料の検討(宮越・平方・瓜生・日向)
- ・5月13日授業者(宮越会員)共愛小学校を下見し機器や授業場所の確認
- ・5月16日10:45～第1回授業(宮越会員…授業内容は9月のサロンでお話いただく)
- ・第1回目の授業後、その内容・児童の様子や児童からの質問等を大使館に提供し、それを参考に2回目の授業の組み立てをお願いします。(簡単な英語で進める組み立ても試行して下さったが、学校から日本語主体でとお話があった。)
- ・6月16日10:45～第2回授業(大使館員ホーボルト幸夫さん・ハシュケ暁子さん)
(共愛学園小学校長・教頭・担任2名・他の職員3名・ぐんま日独から3名・上毛新聞社記者)

3. 授業の様子

共愛学園小学校のHPに第1回目、第2回目の授業について写真入りでくわしく紹介されています。

第1回目授業：共愛学園 Top>新着情報>2022年05月の新着情報>5年生がドイツについて学びました

第2回目授業：共愛学園 Top>新着情報>2022年06月の新着情報>ドイツ大使館職員の方が特別授業をしてくださいました！ また、Twitterでも紹介されています。

<第1回目授業の様子>授業者：宮越リカ会員



<ドイツってどんな国?>



<自己紹介とぐんま日独協会の紹介>



<160年前からお付き合い・・・>

授業を受ける児童(5年生)と同じ年頃にドイツで生活し、学校生活をした宮越会員の体験をもとにドイツについて様々なことを話していただいた。児童は興味を持って聞くことが出来た。



<Hitzefrei わあ～いいな～>

<第2回目授業の様子>授業者：大使館職員ホーボルト幸夫さん・ハシケ暁子さん



<大使館のお仕事をサッカーチームに例えて説明>



<ドイツ大使館ってどんなところ、
どんな仕事をしているの>



<さまざまな食について>



<ドイツの子どもの嫌いな野菜は？>

大使館の役割や仕事内容をわかりやすくサッカーチームに例え話していただいた。また文化や価値観の違いについて理解する事や、授業の最後には語学の大切さについてお話しいただきました。それは児童の心にとっても響いたようだと言任の先生方が喜んでおられました。英語教育に力を入れている共愛学園小学校の教育理念も忘れずに話してくださって本当に有り難かったです。

この後、児童はドイツについて調べたことや分かったことなどの学習の成果を PowerPoint でまとめて発表する予定だそうです。

子ども達の感想ピックアップ

- ・何より楽しかったのは、クイズ。たくさんの児童の感想にありました。アイス～ ハリボ バウムクーヘン などなど(対抗戦になったことも盛り上がった理由の一つみたいです)
- ・大使館の仕事がよくわかった。むずかしいイメージだったが、日本と結ぶ大事な場所。
- ・日本とドイツは長い歴史がある。これからも、続いてほしい。
- ・ドイツのことは知らなかったが、興味を持った。大人になったら行ってみたい。
- ・お土産がうれしい。大切にしたい。
- ・ドイツの絵をがんばって描きたい。大使館に招待されたい。



4. まとめと今後

今回の事業実施に当たり大使館や共愛学園小学校に多大なご協力をいただき終了することが出来ました。大使館も学校もそれなりの成果を感じていらっしゃることはうれしい。また児童がドイツについて興味関心をもって調べ学習をしたり、PowerPoint で発表したりと学びが広がっていることは素晴らしい。この事業の目的とする「次代を背負う子供たちにドイツについて知ってもらう」は大使館や学校との連携で無事終了することが出来たと思う。

大使館から、共愛学園高校に夏休み中のワークショップ参加についての相談もなされた。(大川学園長=小学校長兼任が高校に話し参加者を募る約束がなされた)

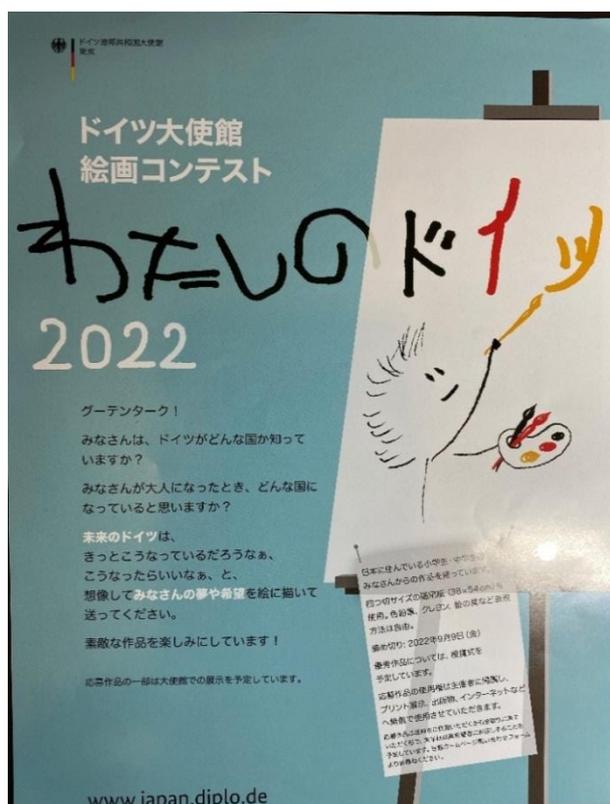
今後もこのような国際理解教育のお手伝いできることが広がっていく可能性を秘めていると感じる。

<お知らせ> ドイツ大使館絵画コンテスト「わたしのドイツ」2022

今年もドイツ大使館主催の絵画コンテスト「わたしのドイツ」の季節がやってきました。

昨年は群馬県から50点もの素敵なお作品の応募がありました。

今年のテーマは「未来のドイツ」



締め切り：2022年9月9日(金)

資格：日本に住んでいる小中学生

応募方法：四つ切りサイズの画用紙(38×54 cm)

色鉛筆、クレヨン、絵の具など

表現方法は自由

著作権：応募作品の使用権は主催者に帰属

詳細につきましては大使館ホームページをご覧ください。

【ぐんま日独協会名誉会長 故平形義人さんのこと】

海軍軍医だったころの思い出から

平形先生は、旧制武蔵高等学校（※1）から千葉大学医学部に進学した。昭和19年に卒業後は、父親が軍医でもあったことから軍医を志願し、海軍軍医学校（※2）に入校、平形先生はその第一回生。

卒業後は海軍軍医として戦艦長門に乗艦したが「長門」は当時、もう燃料不足で横須賀港に係留されており出撃はなかった。

その後は仙台の北方、女川の海軍防備隊（※3）付きに転属になった。

ここでは仙台湾岸にあった海軍病院も沿岸守備の任にあたった。

ある時仙台の北の山田湾（岩手県山田町）で、輸送船が攻撃されて負傷者が多数出たためその手術を頼まれた。腹膜炎を起こしていた重傷者を3人並べ、手術をしたら3人とも助かり、それですっかり有名になった。後日、山田から女川まで来た人が拝んでいった。先生は感激の至りだった、という。

その話をご自慢のたねだった。



海軍軍医（中尉）に任官したころの平形さん

昭和20年大東亜戦争の終戦で、海防艦（※4）67号の軍医長を拝命、海外の島にいた負傷者救助に当たった。舞鶴では海防艦は輸送船用に改造され日本へ戻る人をより多く乗せることになったという。

その後、群馬で眼科を開業された。

昭和63年（1988）、ぐんま日独協会が創立となり、先生はその初代会長に就任された。設立以来、平成20年（2008）までの20年間、会長職としてご尽力され、その間には全国日独協会連合会の副会長も務められた。

訪独親善の際にはお得意の仕舞を現地で度々ご披露され、日独の文化交流にも貢献された

親善交流や医学交流の功績に対し、平成20（2008）年5月にはドイツ連邦共和国ケラー大統領より『勲一等功労十字章』を授与された。



※1 大正10年（1921）12月、現在の東京都練馬区に設立された私立で初の旧制7年制高等学校。新製の武蔵高等学校（および中学校）、武蔵大学のルーツになる。

※2 軍医および看護師・薬剤師を養成する教育機関。1943年、増員に備え、戸塚海軍病院（横浜市）に分校を併設。

※3 宮城県女川町。女川防備隊は1100名より成り、沿岸防備などにあたった。なお、海軍の陸上部隊として海軍根拠地隊という似た名称のものがあるが全く別の組織である。

※4 沿岸・領海の警備防衛、船団護衛、対潜哨戒等を主要任務とする軍艦。小型から大型まであった。

故平形先生の思い出

鈴木 喜代

1. 平形義人様は渋川市に住む眼科医で、渋川市の名士でした。穏やかでお話の好きなすてきな紳士でした。平形先生のお屋敷は広く、庭の築山には元東武鉄道の「チンチン電車」が1台長い間置かれていました。この型の電車は明治43年に作られ、渋川町新町を起点に高崎、前橋、伊香保へ線路が敷かれ、大切な市民の足でした。伊香保線は最後まで残り昭和39年に廃止されました。平形先生は、50年間走り続けた電車を譲り受け、平成25年頃渋川の町おこしのために渋川市に寄付して下さいました。市では車輪をつける等修復しました。平成26年1月25日に「渋川町割り400年」のグループで企画した「おかえりなさいチンチン電車、渋川に帰る」で、渋川四つ角イベント広場に大勢の人が拍手と鳴り物入りで出迎え、往時を懐かしく思い出していました。この後に皆様に見送られ伊香保町「峠の公園」に置かれ、現在は貴重な観光資源として、また文化遺産として復活しました。これだけの大きな電車を保有し、寄付する平形義人先生は誠に奇特なお方です。先生はこの前年平成24年4月にお亡くなりになりました。遠い国でお喜び下さっているように見え、心から感謝申し上げます。

2. 平形先生は昭和19年に千葉医大を卒業され戦艦「長門」に配属になり、昭和20年大東亜戦争の末期に軍医として輸送船に転属、そこで重傷者を3人並べて難しい手術を手がけ「3人とも助かった」お話はご自慢でした。

3. 平形先生は私の実父堀口吉七が主宰していた奉仕経済団の谷村勇先生の講演会によく出席されてきました。昭和32年頃の講話「教育勅語と西独首相」に深く感銘を受けられたようです。アデナウアー西独首相がドイツ復興の筋金を入れるにはどうするかを諮問したところ、多くの知恵者が、日本の大和魂の経典「教育勅語」こそドイツ再建の基本精神であると答申した。アデナウアー首相の部屋には「教育勅語」とその独訳が掲げられている、孝行という独語はないので、そのまま創作し教育勅語を独訳し、全ドイツの学校に掲載させたそうです。しかるに日本は昭和21年に国会で「教育勅語」をやめてしまった。生きる指標がなくなったので日本はダメになったと平形先生は嘆かれ、今からその素晴らしさを再認識しようとおっしゃっていました。海軍元軍医の平形先生は大和魂で鍛えられた方でした。教育こそ国力の源泉である。

4. ドイツ親善旅行 平成15年5月26日～6月5日(11日間)。ぐんま日独協会15周年記念事業として、独日協会連合会年次総会が5月30、31日ブラウンシュバイクで開催されるので、群馬から15名が参加しました。平形義人会長様は独語で祝辞を述べ、お仕舞をなさり、鈴木克彬・和子ご夫妻はフォークダンスを披露し、会の終わりには皆でドイツ民謡日本の歌が大合唱となり、駐独日本大使や在ドイツの日本人、ドイツ人と歌い話し親善を深めることができました。5月のドイツは爽やかで晴天に恵まれ、各地の観光とホワイトアスパラ料理をいただき、平形先生と楽しい旅をさせていただきました。

5. 平形義人名誉会長がドイツより叙勲される

平成20年5月15日、東京広尾のドイツ大使館に招かれました。平形義人様、小成田文郎様、鈴木克彬・和子ご夫妻と共にホールに集い、三々五々立ってまずドイツ大使が叙勲のご挨拶、次いで「ドイツ連邦共和国功労勲章一等功労十字章」を先生の胸に着けて下さいました。続いて平形先生がご挨拶をなさり、皆様からお祝いをお受けになりました。カナッペとビールとブドウ酒が出る、立ったままでいただく、お庭は日本庭園で美しい。簡素な叙与式で一時間で終わりました。おめでとうございました。

故平形義人名誉会長の思い出

堀口 靖之

第1部

ぐんま日独協会（GJDG）は渋川市石原で先代から親しくして頂いていてドイツ語が得意な平形義人先生（眼科医）（1920—2013.4）が創立に率先してたずさわり、初代会長をなさり発展してきた生い立ちと思います。薦められて入会したのが1980年代でした。先生はお能もおやりでドイツ人にも披露されたことがあり、好評を博していたと思います。またわかりやすい発音で丁寧な説明で会を進行されていました。

しばらくして先生から東京の「日独協会」（JDG、1911.10.30 発足、機関誌 2022.2 Nr722）（会費年7千円）にも入らないかと誘われて参加して35年後の今も続いています。その機関誌”Die Brücke”ですが、最近は隔月発行に少なくなりましたが、有益な記事と印象に残るエッセイ等が多くありとても良い雑誌です。

またUSや英語誌にはないユニークなドイツ・スピリットの記事があり、たいへん参考になります。世の中は英語だけで成り立っているのではないという気味がにじんできるところです。ご存知のように、Berlinの街・ホテルで新聞等を見てもテレビを見てももちろんドイツ語ばかりで、英語はさがしてもほとんどみつからずやっとBBCがある程度で、英語のない欧州大陸はこういう変わった雰囲気なのかという印象を受けたことを思い出します。

私は北米大学のあと、ドイツには1969年に3ヵ月欧州旅行をし、74年にはスイス、ベルリン、91年ロータリーのRheinland州学生2名を1週間在宅させ、94年はLübeck市ロータリー女子学生2名1週間在宅などの交流がありました。

当時、群馬県ROTARYクラブDIN2560（現2840地区）は90～95年は夏季交換学生先にドイツを選んでた時がありました。来日したドイツ青少年の英語の挨拶は、群馬の青年の英語力が少なかったのに比し、大変堂に入って立派でした。他の業界のBerlinでのISO会議だったのですが、ドイツ代表の英語の話もタイプでも早くて立派でした。彼ら青少年の会話の中で、残念なことは何かという質問には、今はドイツ語が世界で昔ほど通用しないことがあるといていたことが印象に残っています。

一般にドイツ人はドイツ語と英語が二刀流のできる人が少なくないことです。それはドイツのメリットです。しかしドイツの有名なポピュラーなエンタテイナーがないことです。ソングは英語にしないと外国には売れないので、ついミュージックは英語になってしまうことがあるのかもしれませんが。

第2部

平形先生のお宅の前は渋川高崎街道25号線です。1893年から馬車鉄道が走り、1910年には郊外型電車通称チンチン電車が1953年まで頻繁に走っていました。私のおばさんもそれに乗り高崎女学校に通っていましたが、金古あたりから福田勉夫さんも乗って高中へ通っていたことを聞きました。

先生は生まれた時から親しんでいたチンチン電車の保存に努力され、自宅の庭に廃線後本物を購入し展示して市民に供しておりました。渋川市が2013年伊香保交通公園にその電車を陳列にしたいと申し入れがあった時、同意され現在はそこで見られます。

沼田市と国際姉妹都市フュッセン市について

金井 康夫

オーストリアとの国境に接するアルプスの麓、ロマンチック街道の終点に位置し森林と湖に囲まれた美しいまちフュッセン市とは、昭和63年11月の日独ロマンチック街道姉妹街道締結以来、年々幅広い交流が進められてきた。平成4年11月には沼田商工会議所とアウグスブルグ・シュヴァーベン商工会議所との友好商工会議所提携が締結された。こういった動きの中、平成6年5月に国際姉妹都市提携の早期実現に関する陳情書が“国際姉妹都市を考える市民の会”から提出され、市議会の総務委員会、議会運営委員会において審議された。また、これに先立ち、6年4月、フュッセン市議会では沼田市との姉妹都市提携について満場一致で決議されており、これを踏まえ、6年1月、助役を団長に市議会と当局との代表団がフュッセン市を訪問し、調査結果を議会運営委員会に報告した。その結果、平成7年3月22日、沼田市議会において全会一致でフュッセン市との国際姉妹都市提携が議決された。

平成7年8月2日に、フュッセン市長夫妻ほか関係者を迎え、沼田市議会議事堂において、沼田市とフュッセン市との姉妹都市協定締結について合意をしたとの覚書に両市長が調印し、更に9月29日、西田治司沼田市長（元ぐんま日独協会副会長）夫妻をはじめ、沼田商工会議所、沼田祇園囃子保存会連合会などの関係者が、市制施行700年を祝うフュッセン市を訪問し、正式に姉妹都市提携が調印された。当時の西田治司沼田市長の“真に信頼される国際交流がいかに大切か”という先駆的な考えが実を結んだ。姉妹都市提携により、沼田市とフュッセン市は、平和友好、平等互惠、相互信頼、長期安定の原則に基づいて、産業経済、教育文化等各般にわたり幅広い交流活動を進めて、両市の相互理解と友好を深め、日独両国の友好親善に寄与することを誓い合った。

その後、ドイツザクセンゴースブルク・ゴータ家皇太子殿下が沼田市にご訪問、また小中学生の絵画交流会や平成10年5月に沼田市で開催された第49回全国植樹祭にフュッセン市長ほかアルプホルン奏者などを迎え、ボダイジュの苗木の交換を行うなど、それぞれの分野の様々な交流が進められてきた。

姉妹都市提携の5周年記念には西田治司市長夫妻や議長をはじめとする公式行事訪問団、市内小中学生による未来特使訪問団、そして沼須人形芝居あけぼの座の関係者による文化使節訪問団がフュッセン市を訪問し、記念式典への参加や児童生徒の交流授業、また、人形芝居の公演など交流を図るとともに、沼田市ではフュッセン市長夫妻ほか関係者を迎え歓迎式典を開催するなど、両市の友好を促進するとともに、提携当時の約束を新たにかつ強固にしていくことを確認しあっている。

近年ではドイツ出身国際交流員と行くドイツ訪問としてドイツツアーを実施し、フュッセン市訪問では大歓迎を受けるなどグローバル教育の発展に繋がった。また、ドイツカーリング選手団、フェンシング選手団(共にフュッセン市出身選手)らが沼田市に訪問するなどスポーツの分野でも交流の機会が増えさらに両国との絆は強まっている。

このように日独ロマンチック街道姉妹街道締結以来、両市は様々な交流や相互訪問を重ねてきた。ともに美しい山々や自然に囲まれ、固有の文化を大切にする気風を持つ両市は、今後より一層の理解と友情を深め互いを尊重し合う良好な関係を持続していく。

沼田市・フュッセン市姉妹都市提携 10 周年記念式典参加の懐かしい思い出

川田 正彦・正江

姉妹都市フュッセン市は、ドイツの南部にあり、人口は1万4千人余り、オーストリア国境と接し、アルプスを望む、ドイツ・ロマンチック街道終点の街である。バスから降りると、フュッセンの風は肌に冷たく日本の初冬を思わせるものであったが、7百年の歴史を誇る静かなたたずまいが感じられ、アルプスに近い厳しい自然との闘いの中でしっかり根をおろしたことが感じられる街であった。市内は夜のとぼりが降り、建物は下からの照明により浮き上がって見え、街灯もその下だけを照らし、余分な明かりが他へ影響しないように配慮されていて、日本ではなかなか味わえない独特な雰囲気をかもしだしていた。

翌日は、朝食の後、フュッセン市観光局の方々の案内により、フュッセン市の散策となった。まず、市庁舎隣の銀行の展示室に行き、沼田市から送った沼田市小中学生の絵画42点を、多くのフュッセン市民と一緒に鑑賞した。続いて、中世の修道院であったという市庁舎へ案内された。建物の作りもさることながら、家具、絵画などの調度品、天井や壁などの彫刻、いずれもむかしのままの姿で保存され、現在も利用されているとのこと、ドイツの素晴らしい国民性を知らされた。昼食はフュッセン市観光局の建物の中で、観光局スタッフによる手作りのバイエルン風ホワイトソーセージがふるまわれた。

午後は、ノイシュヴァンシュタイン城へ向かった。車窓からの、バロック様式の教会の塔、細い路地、高い切り妻、郷愁をそそる街角、雄大な山脈と緩やかな丘陵など、フュッセン市の豊かな文化と壮大な景色との混在は、本当に比類のないものを感じられた。白鳥城の異名を持つ城が、その名の通り、日の光を受けて、白い姿をくっきりと浮かび上がらせているのが見えた。眼下には点在する湖が、緑の絨毯を敷き詰めたような牧草地の先に映り、遠くの山々と調和した眺めは、本当にお伽の国を思わせるような素晴らしい景観であった。豊かな自然を残しつつ、世界に誇る自国文化を護っているこのドイツの努力には、唯々頭の下がる思いがした。

夕方からは、いよいよ「姉妹都市締結10周年記念式典」である。10年前調印式が行われた市庁舎(中世の建物・セイントマング修道院君主の間フルステンザール)で行われた。まず、訪問団は市庁舎広場で、アルプホルンバンドによる歓迎を受けた後、フュッセン市関係者(凡そ60名)とともにフルステンザールに通され記念式典に臨んだ。フュッセン市音楽学校の生徒によるバイオリンとピアノの演奏で始まった式典では、両市長の挨拶の後、両市の友好関係を将来にわたり継続させるという公文書が書かれた『黄金の本』に、訪問団全員が署名した。ガングル市長から全訪問団員に直接に、フュッセン市カレンダーと記念バッジのプレゼントがあった。沼田市からは、迦葉山の犬面と瑠璃観音菩薩像(沼田の田村實仏師作品。この仏像がフュッセン市に幸運をもたらしますようにとの願いを込め)を贈呈した。

式典後、会場をノイシュヴァンシュタイン城近くの湖畔にあるホテルに移して、レセプションが始まった。アコーディオンとギターとが奏でる弾むような明るい演奏に迎えられ会場に入った。演奏者達は、バイエルン地方の落ち着いた民族衣装をまとい、スマートな帽子をかぶって満面の笑顔で迎えて下さった。飾られたお花といい、舞台背景といいフュッセン市の心づくし、それはそれは素晴らしいものであった。

言葉ができないために戸惑うこともあったが、身振り、手ぶり、表情で楽しみ、説明し合った。可笑しいやら恥ずかしいやら、失敗も沢山あった。また、こちらのブローケン英語・独語に対しても、フュッセン市の皆様は親切な心をもって誠実に対応して下さいました。さらに、わが町・我が国土に誇りを持ち、自分の人生観に自信を持って暮らしておられる様子をうかがうことが出来、大いに感動させられた。お互いのわかれようとする努力、盛り上げようとする努力によって、素晴らしいレセプションとなった。

【表紙解説】 Heimat のロゴ、草津湯畑、和算の大家『算聖之碑』

長井 宏之

表紙は、『Heimat 第 60 号・記念号』及び本会に相応しいものを精選した。その内容も、ドイツと群馬県に特に関連するものに限った。なるべく珍しい、知られていない事項を取り上げて解説する。

【*Heimat* の筆記体ロゴ】は本会の創立時の初代会長・平形義人氏の書かれたものである。

【草津温泉湯畑 Kusatsu Heißwasserquelle】一大保養地であり、医学上重要な存在である。

左上の写真は本会の Web ホームページに現在掲載されているものである。湯畑は草津温泉の温泉街の中心にあり、多量の温泉が湧出している一帯で、畑に似た外観をしている。写真の白色の部分では高温の蒸気が噴出している。温泉の湯から採れる硫黄は「湯の花」と称する観光土産で入浴剤になる。

近くの草津白根山一帯は上信越国立公園の一部。冬は草津温泉スキー場でも有名である。大型のスキー場で知られ、嘗ては白根山頂付近から温泉街の近くまで滑降できたので「全長 12 km のゲレンデ」と宣伝していた。スキーの後に宿の温泉で疲れを癒すのは格別な楽しみである。草津温泉は日本一の豊富な湯量を誇るので湯畑を取り囲んで大小多数のホテル、旅館、民宿がある。

草津温泉は、ドイツ人 Erwin von Bälz 博士 (1849–1913) により西欧に知らされた。博士は日本に 29 年間滞在し、その間に日本の社会・文化・伝統・日本人を観察して文化人類学的な記録を残した。

群馬県民では知らない人は無い、『上毛かるた』には、「草津 (くさづ) よいとこ薬の温泉 (いでゆ)」という札がある。なお、群馬県人は、「くさつ」ではなく、「くさづ」と濁って発音する習わしである。

【(参考) 上毛かるた：群馬県の全ての小学生が親しむかるたである。群馬県内の有名な地名、偉人、風物、自然、産業、文化などを折り込んで郷土の知識獲得や情操教育に貢献している。毎年正月休みの後で競技会が各地域で開催される。選抜されて出場した県大会では、優勝者は「群馬で一番、即ち世界で一番」と称賛される。】

【関孝和の座像と「算聖之碑」】群馬県藤岡市の藤岡市民ホールには、敷地の北西の隅に隣り合わせに関孝和を讃える座像と巨大な石碑とがある (次ページの写真・説明をご覧ください)。

関孝和は、日本史上特に秀でた数学者であった。後世に「算聖」と呼んで讃える人が現れた。江戸時代は、算とは計算、数学的操作などのことで、広くは数学全般をも意味した。

明治中期頃以前の日本の“数学”を和算と呼ぶ。外国の“算 (数学)”に対して、和 = 日本の算であることを強調したものである。和算界では学者たちの研究書の他に、庶民向けには多くの実用書、教育書があった。現存しているものが多数ある。そのほかに「算額」と呼ばれるものが全国に多数現存している (戦災や廃棄で失われたものはその倍よりは多かったと思われる)。これは神社や寺院の軒下・壁面などに奉納・掲示された板状のものである。そこに数学の問題が書かれている。殆どが幾何学図形の長さや面積を求めるものである。現代の数学科の大学生でも簡単には解けない高度なものも多くあった。群馬県には算額が多数現存していてその枚数は全国でも最多状態である。わが国以外の諸外国には算額の風習は無かった。わが国は国中で子供は寺子屋・手習い所に通い、大人は都会の町民も地方の農民も高度な数学に親しんだのであって、それは世界中ほかに無かった文化現象である。

関孝和はそれらの諸現象の礎を大いに開拓して後に関流の祖となった。後世群馬の地は安中の小野栄重、岩井重遠、吾妻の剣持章行、玉村の斎藤宜長・宜義父子、前橋の石田玄圭、萩原信芳など、他県地域にまで名をなした有力者を多数輩出した。彼らは研究し、著作し、弟子を育てた。

算聖之碑には、当時の大数学者東大教授・藤澤利喜太郎博士が文章を書いた。その中に、世界三大数学者として、イギリスのニュートン (万有引力、微積分の発見で有名)、ドイツのライプニッツと並んで関が紹介されている。大げさだ、という人もいる。ライプニッツは単子論で著名な哲学者で、微積分の発見をニュートンと争った。今日高校数学で習う微分・積分の $\int_0^3 \frac{dy}{dx}$ などの記号や「関数」などの用語はライプニッツのものに由来している。関は藤岡の生まれと伝わるが江戸の生まれという説もある。分墓は藤岡市光徳寺にある。墓の本元は東京新宿の浄輪寺にある。算聖之碑は昭和 4 年に建立され、昭和 63 年 1988 年までは藤岡市字城屋敷 (バス停「英霊殿」の隣) の地にあった。筆者 (長井) は碑の 20m 横を歩いて毎日通勤、13 年間親しんだ。

【群馬に縁りの「和算の大家 関孝和」と日・独・英 「世界三大数学者」】

長井 宏之



Sitzende Figur mit Blick nach Osten.
Dies ist SEKI Kouwa.
Der 'Weise der Mathematik'.
Er ist der heilige Mathematiker, d.h. der
Weise der Mathematik.

東を向いた座像。「算聖」関孝和である。
聖なる数学者、即ち数学の賢人である。



Unmittelbar nördlich der sitzenden Statue
steht das Denkmal für den Weisen der
Mathematik zu Ehren von SEKI.
SEKIs Name ist Kouwa, aber er wird auch
als Takakazu gelesen.

座像のすぐ北側には、関を讃える「算聖之碑」
がある。
関の名前は、コウワ であるが、 タカカズ
とも読む。

Dies ist das Monument des Heiligen Mathematikers.
Die enorme Größe des Denkmals ist deutlich sichtbar.
Darauf sind die Namen von drei der größten Mathematiker
der Welt geschrieben. Einer von ihnen ist SEKI Kouwa.
Die beiden anderen sind I.Newton und G.W. Leibniz.

これが「算聖之碑」である。石碑の巨大さがよく分かる。
そこには世界の3人の偉大な数学者の名前が書かれている。
その一人が関孝和である。
あとの二人はI.ニュートンと G.W. ライブニッツである。

ルートヴィッヒ II とリヒャルト・ワーグナー

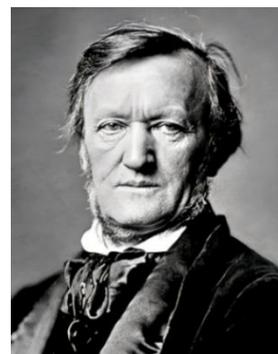
平方 秋夫

1. ルートヴィッヒ II 即位以前の二人 ルートヴィッヒ II (1845~1886・在位 1864~1886) の少年時代



は夢見る少年であり、最も好んだのは読書、特に好んだのは戯曲であった。その中でも「ニーベルンゲンの叙事詩」を彼は心底楽しんだ。13歳のクリスマスにワーグナーの著書である芸術論「オペラとドラマ」をプレゼントされるが、この時初めて彼の名前を知ることになる。15歳にして初めてのオペラ見学を経験する(1861年2月2日)。ミュンヘン王室オペラ座の当夜のプログラムは『ローエングリン』であった。以後、ルートヴィッヒの精神は大きくワーグナーに心酔して行き、青年ルートヴィッヒの感受性はワーグナー的熱狂の虜となる。翌1862年『タンホイザー』を見物。1863年初頭、彼はワーグナーが出版したばかりの長編詩『ニーベルンゲンの指輪』を手にする。現実の世界から離れ、オペラ座通いを続けていた。

一方、ルートヴィッヒよりも30歳以上年長のリヒャルト・ワーグナー(1813~1883)は、1842年(29歳)5幕オペラ「リエンツィ」の公演が大成功となって初めて世間に認められた。翌1843年「さまよえるオランダ人」の初演。ここでドレスデン王室劇場の首席指揮者ポストに就く。後、1845年「タンホイザー」ベルリン公演では評価が極端に分かれた。新聞は敵意に満ち、批評家は作曲を頭ごなしに弾劾した。だが、観客は熱狂した。ワーグナー崇拜の始まりである。1848年革命に際しては、音楽家であるよりアジテーターとして行動する。この年「ローエングリン」を作曲。翌年、革命家として警察に手配される身となり、投獄の危機避けて逃げ出し、スイスに亡命。あちらこちらで借金を重ね、借金取りから逃げ回る日々であった。奔放な生活と女性問題を含め、落ち着かない状況が続いていた。



2. 即位の年からパイロイト祝祭劇場完成 ルートヴィッヒ II とリヒャルト・ワーグナーとの交流

は1864年、ルートヴィッヒが即位した18歳から約20年に亘って続くことになる。国王は即位すると直ちに心酔するワーグナーの探索を命ずる。秘書官長はワーグナーを発見、説得して、国王との面会が実現する。国王からの膨大な援助の申し出に対し、ワーグナーは当時の気持を「貧困は消え、必要なものは全て手に入ります。私はただ王のそばにいればいいのです……あまりにも幸せで、我を忘れる思いがします。」と手紙に書いている。王の庇護を良いことに国政にも口を挟むようになり、国庫の金を使い贅沢三昧の暮らしをしていることに議会が猛反発し新聞も同様に書き立てた。王の臨席の下で「トリスタンとイゾルデ」の初演が行われた。しかし1865年秋、ワーグナーはこの戦いに敗れ、傷つき、ルートヴィッヒ II の下を去ってゆく。国王との軋轢そして和解を繰り返しながら援助は途絶えることがなかった。

1871年春、ワーグナーは生涯の夢であったワーグナー祭典の劇場、ワーグナーの聖殿を造ろうと計画し、ルートヴィッヒがその建築費用を拠出した。1876年にパイロイトに完成された劇場(現在のパイロイト祝祭劇場)のこけら落としは「ニーベルンゲンの指輪」、観客はルートヴィッヒ II 唯一人であった。

3. ワグナーの死・ルートヴィッヒの死 1883年2月13日、ワーグナーは死んだ。ヴェネツィアの

ヴェンドラミン宮殿でのことであった。(享年70歳)。その報を聞いたルートヴィッヒは「一人にしておいてくれ。」「ワーグナーの遺体は私のものだ。ヴェネツィアからの移送は私の命令通りに」と叫んだという。

そして1886年6月12日、ルートヴィッヒ II は国王の座を剥奪されノイシュヴァンシュタイン城からベルク城に移送、幽閉された。翌6月13日、夕方侍医グッデン博士と共に散歩に出かけ、夜、近くのシュタルンベルク湖で二人とも溺死体となって発見された。原因は未だ謎のままである。

「カール・オルフの教育」 ドイツ人作曲家

瓜生 郷子

私はドイツ・フライブルグの音楽大学で打楽器を専攻する傍ら、先生の勧めで幼児音楽教育の授業も履修しました。そこで出会ったのがカール・オルフの音楽教育でした。カール・オルフは、ドイツの偉大な作曲家であり、教育者であります。1895年ミュンヘンで生まれミュンヘン音楽学校で学んでおり、最も有名な作品に「カルミナブラーナ」があります。一方で1930年頃の作品に「オルフ・シュールベルク／子どものための音楽」があり、初歩レベルの子供達が容易に楽しく演奏ができるため、世界中の教育現場で利用されている作品です。彼がそのシュールベルクを通して、私たちに伝えたかったことは、テクニックや理論ではなく、音楽を通じて、自分やまわりの事を知ること、音楽を演奏したり創ったりする中で、自分を育て自分を見つけていくことだったと思われまふ。一つ特筆することは彼がマニュアルや指導書を残さなかつたことです。メソッドがないということは、何かを覚えれば、曲を完成させればお終いということではなく、その工夫は永遠に続きます。それは自由であると同時に、教える側に責任もあるということの意味します。彼が設立したザルツブルグのオルフ研究所では、世界中からたくさんの方が集まって勉強し研究をしています。そこでの主専攻は、「音楽と動きの教育／Elementare Musik und Bewegungserziehung」です。この学びの中の一つの手法として「ことば」をリズム化することにより、無理なく生きたリズムを学んだり、音楽を「動き」で表現することにより、体で音楽を感じたりすることがあります。また、彼はオルフ楽器という色々な種類の打楽器を考案しました。これには一つ一つの音盤が独立して演奏できる楽器や、音盤を一つ一つ外せる鍵盤打楽器があり、容易に演奏できることで音色に興味・関心をもつことができ、子供自身の工夫で様々な演奏が広がり、音楽のよさや楽しさを味わえるように作られています。



カール・オルフ (Carl Orff 1895年～1982年)



先ほど触れた指導書がないということをもう少し深めると、オルフに関する研究者や教育者は、オルフがマニュアルを残すのではなく、なぜこのような子供のための作品を書き残したのかを探求することが課題となります。我々指導者はオルフのスタイルを継承した先生・先輩方のレッスンなどを通してその理念を学び、自分なりの展開を考えて子供たちに提供していきます。この世界では基本的に教案の模倣は許されません。

先に述べたように作られています。

先ほど触れた指導書がないということをもう少し深めると、オルフに関する研究者や教育者は、オルフがマニュアルを残すのではなく、なぜこのような子供のための作品を書き残したのかを探求することが課題となります。我々指導者はオルフのスタイルを継承した先生・先輩方のレッスンなどを通してその理念を学び、自分なりの展開を考えて子供たちに提供していきます。この世界では基本的に教案の模倣は許されません。

オルフが彼の理念に基づいて行ってきたことは、限られた空間、時間の中での特定の教科ではなく、私達人間を包み込んでくれる人間教育であったと聞いています。それは音楽での表現という手段を通じた教育のあり方と自己のあり方の探究であり、教師と生徒の従属関係があるのではなく、人間と人間が向かい合う姿勢が浮かび上がり、ひいてはその中に素敵な音楽空間を生むことができるということであり、そのような関係性に身を置くことができた時に見えてくるものの大きさは計り知れないものであり、それは素晴らしい創造の世界を構築していくのです。

ドイツでのドライブはご用心

明田 隆

みなさんはドイツ国内で自動車を運転したことがありますか？ドイツでのドライブ事情をご説明します。

●速度“無”制限区間と速度規制区間が混在するアウトバーン

さてドイツと言えば高速道路「アウトバーン die Autobahn」が有名です。これは速度無制限区間が全区間の約 50%もあり、どんなにスピードを出しても違反にはなりません。生活を始めたときは不慣れなため走行車線（日本とは違い一番右側）をゆっくり走っていましたが、いつの間にか追い越し車線を 150km/h で運転していました。無制限区間の推奨速度は 130km/h（日本の法定最高速度は 100km/h）ですから、慣れというのは恐ろしいです。このアウトバーンは高速走行に適するように設計されていますが、場所によっては速度規制区間があります。日本とは異なりオービス（速度違反自動取締装置）があちこちに設置されており、5km/h 以上の超過で速度違反となり、すぐに写真を撮られ罰金の振込用紙が会社や自宅に送付されます。罰金は速度超過の度合いによって決められており 10km/h 程度の超過であれば€ 15~20 です。なおこのアウトバーンは日本の高速道路とは異なり無料で利用できます。そのため料金ゲートがなく、利用料はガソリン代に含まれています。一般道路との接続もよくできており、合理性を重んじる国民性が出ています。その一方、サービスエリアはどの場所でもほぼ同じ建物、同じレストランで同じメニューなので楽しみがありません。日本と同様サービスエリアにはきれいなトイレ（欧州は基本どこでも有料）があります。トイレの入り口にある自動改札機に 70 セントを入れると入場でき、その時にサービスエリアで使用可能な 50 セントの商品券を受け取ることになります。つまり 1 回 20 セントで用を足せることになります（2018 年当時）。ただし子供は無料で利用できます。

●ルールを守るドイツ人

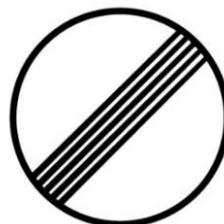
連邦道路（Bundesstraßen）や市街地にある一般道についてもご説明します。前者はアウトバーンでは結ばれていない街と街を結ぶ道路という位置づけで最高速度は 100km/h ですが、アウトバーンと同じように幅が広く高速走行できるようになっていますが、速度には気を付けないといけません。次に後者ですが、街中の一般道の制限速度は 50km/h です（場所によっては 30km/h）。多くの街の入り口にはオービスが設置されており、目を光らせているため制限速度を順守しています。

さらに信号のない横断歩道では止まることをドイツ人は徹底しています。そのため歩行者も「車は止まるもの」と思っているのが、車が停止する前に横断歩道を歩き出す人さえいます。ここで横断歩道の思い出をひとつ。次女が 2、3 歳のころ三輪車に乗って横断歩道を、ぼくと一緒に渡っていました。まだ不慣れな次女は思うように三輪車をこげません。そんな時オープンカーがやって来て横断歩道の手前で止まりました。僕は慌てて次女と三輪車を横断歩道から移動させようとする、「ゆっくりでいいよ、かわいい子だねえ」と、オープンカーから乗り出した女性が僕に声をかけてくれました。日本ではありえない光景にちょっと感動したというか、ドイツ人の余裕や寛大さを感じたことを覚えています。

ドイツ国内の運転事情を簡単にご説明しました。みなさんもドイツでドライブを楽しんでみませんか？



アウトバーンのマーク



速度無制限区間のマーク

ドイツの障がい者施設ベーテルを訪ねて

後藤 京子

ベーテルという障がい者施設は、ドイツの中央から少し北に位置するビーレフェルトという市の郊外にあります。ベーテルは、150年前に創設され、今もずっと「医療、福祉の町」として続いています。

1867年にてんかん患者を収容する施設と病院として開設されました。次第に障がい者のための学校や作業場、高齢になった障がい者のための施設とが併設され、今や、町の中には、病院や施設で働いている人のみならず、一般の人も居住し、市バスも走り、スーパーマーケット、郵便局、レストラン、教会、ホテルもあるといった“共生の町”として現在にいたっています。

第二次世界大戦の時、ヒットラーが障がい者を引き渡すよう命令してきたときも、施設長が体を張って彼らを守った話は有名です。

運営は、国、市町村からの補助金、入居者の利用料（両親の所得によって全額、半額、無料）、そして大きい割合をしめているのが、一般の人、企業、教会からの寄付です。

日本でも、昭和40年代あちらこちらで国立コロニーが設立され出し、このベーテルをモデルにしたということです。しかし、日本では初めは国が運営、次第に民間におろし、最近でほとんどが閉鎖されています。高崎の国立のぞみの園も閉鎖寸前ようです。

施設内には、いろいろな作業所があります。木工、はた織り、ろうそく、切手収集、有機農業、パン製造、古着再生等々。

私が見学した木工作業所では、30人程の成人(かなり高齢の人も)の障がい者が2つの部屋に分かれ作業していました。廃材を利用してのストーブの種火用の木材作りやキャンドルを入れるための箱の側面の板、天使やモミの木などの型を切り抜いたものにヤスリをかけたり、色を塗ったりの作業の様子を見ると、何ともゆったりしたもので、“生産性”にはほど遠い！しかし一人一人は「仕事をしている」と自覚していて、胸を張って作業している態度には感心してしまいました。

施設といっても囲いもなく、羊が放牧されていたり、大きな池から噴水も上がり、トイトブルクの森（紀元9年ゲルマン民族がローマ軍に勝利したヘルマンの戦い（トイトブルクの森の戦い）ゲルマン人のルーツ）もあり、障がい者も一般の人ものんびり散歩を楽しんでいます。レストランでは、週末には障がい者同士やその家族らが会食している姿も見られます。ベーテルの中にいると、時間がゆっくり流れ、心癒されます。



私とドイツの繋がり

新井 和幸

私が最初にドイツを訪れたのは1972年の夏でした。二か月有効のユーレイルパスを使ってヨーロッパをあちこち旅行した国のなかの一つでした。何の繋がりもない見ず知らずの私を暖かく迎え入れて泊めてくれた国でした。モーゼル河沿いにあるTrierでは全く見ず知らずの私を日本から来た学生だというだけで自宅に泊めてくれました。そのときはただただ優しい国の一つという思いでしたが後に私の仕事にとっても関係してくるとは思いもよらないことでした。

1978年恵比寿にあるストロボを作成する光学機器メーカーに就職し輸出業務を担当しました。この時に社内にいた家内の美枝子と知合うこととなりました。美枝子は以前に婦人用アクセサリーの輸入商社に勤めており私にドイツを始めヨーロッパのアクセサリーの魅力を語ってくれました。美枝子は海外のアクセサリーの知識があり私は貿易実務経験があったので二人でアクセサリーの輸入を始めました。当初は全く輸入仕入先もわからず大使館を回ったり色々な輸入雑貨の載っている海外雑誌などを調べました。やがて少しずつ海外のメーカーやアクセサリーの展示会を知る事となりました。中でもミュンヘンの南西100kmにあるKaufbeurenは当時世界有数のアクセサリーを生産している“街”であることが分かりました。このことは世界的には知られていませんでした。彼らが生産したアクセサリーの多くはフランスを含めヨーロッパやアメリカに輸出されました。その多くは相手先ブランド(OEM)で販売され“made in Germany”で知れわたることはありませんでした。1980年頃からヨーロッパの展示会やメーカーに年二回出張しました。中でもKaufbeurenの出張は独特でした。多くのメーカーは家内工業で一日3~4軒で3日まわりました。朝から晩までサンプルとにらめっこしていました。この細かい注文をまとめて発送してくれるのが現地の代理店です。メーカーや代理店の人たちを通してドイツ人のまじめさ、几帳面さ、ときには頑固さを知ることとなりました。その多くは私の仕事に大いに役立っています。二十代に旅をしてなんとなくいい国だなあと感じてたことがそのまま仕事に繋がるとは思いもよらないことでした。

残念ながら最近の十年はアクセサリーの生産量は中国や韓国等東南アジアの国々がヨーロッパ、アメリカの生産量を大きく上回っています。ドイツのメーカーもかなりへりました。私のヨーロッパ出張もなくなりこの4年はもっぱらインターネットによる取引のみです。それでも代理店のMr. Feixと私のメールのやり取りのうち仕事は40%残りはコロナのこと、ロシアのこと、孫のこと、趣味のこと、お互いの持病のことなど時に真剣に時に喜びあいながさめあっています。当然のことですがこのようなメールのやり取りは他国のメーカーではありません。

ドイツアクセサリーのルーツは旧チェコスロバキア国の時代に遡ります。第二次世界大戦後チェコのヤブロネックス市から戻ったドイツ市民は新天地Kaufbeurenにアクセサリーの工場を建設しました。彼ら引揚者は一人一個のバッグしか許されず、このバッグの中にアクセサリーを加工するためのわずかの道具をしのばせて鉄道で帰国しました。もちろんこれ以外の財産はアクセサリーを作る技術だけでした。幸い旧ドイツ政府からの援助もあり人々は希望に燃え再出発をおこないこの地をNEUGABLONZ新ガブロンズ(チェコのガブロンズに対して)と名付けました。このため街はKaufbeuren-Neugablonzと二つの名前を併記しています。(駅名はKaufbeuren)。こうしてKaufbeurenは世界のアクセサリー工場となるべくアクセサリーを含むさまざまな技術を習得するための大学を設立しました。

更にこれらの技術をより習得しやすくするため授業料はすべて無料で教材費や工具の費用までも支給されていました。さらに卒業後は有名工場にて技術を磨いた後Meister(マイスター)となって自分の工場を作ることができました。

輸入アクセサリーミルハウス 代表 新井和幸

ドイツに転勤

杉本 隆雄

初めて国を離れたのは1964年東京オリンピックの最中だった。私は商社の機械部で食品工業向け機械を扱う部門に所属していた。その頃、大手乳業会社M社は国内工場の大改造のため当社を通じて米英独から先進機械の買い付けを行うことになった。同社社長と工務部長の各国機械メーカー訪問に私が通訳お世話係として一か月間同行することになった。最初の訪問地サンフランシスコ、次にニューヨーク、ロンドン、最後は運命のドイツ・ハンブルグで買い付けは終了、ご一行は帰国し、その後一週間、ハンブルグ支店のドイツ人社員と仕事や私的会話で親しく付き合い、ドイツ語の心地よい響きに魅了されて私は帰国した。

やがて4年後、私はハンブルグ現地法人勤務者としての社内考査を通過、勇躍同地向けに旅立った。着任最初の晩、ドイツ通として自負する支店長と夕食、注文されたのは大きなお皿のアイスバイン、ザウークラウト、ロートコール、それに大きなビールジョッキ。今まで見たこともない大きな皮付き骨付き豚肉の塊、驚愕する私に彼曰く「杉本、これからお前がここで仕事するには、これが食べないとダメなんだ、食べないなら明日の飛行機で帰ってくれ」とのこと。私は豚の皮や、べろべろの脂肪をいやいやながら平らげ、お皿には骨だけを残した。ビールは何回もお代わりをしたが酔酩はせず、彼は「うん、それでいいんだ」と満足してくれた。仕事は多忙だった。フランス、オランダ、北欧、ワルシャワ条約機構時代の東欧諸国への出張も頻回に行い、私自身充実した毎日だった。夜は日本からの来客接待、皆さんに定番のアイスバインとビールを振る舞い、支店長の言いつけを忠実に守り続けた私は100キロの巨体に変貌した。ある日、日本から来たお相撲さん(若三杉)と飛行機に乗り合わせた時、CAさんから「親方さんですか」と聞かれ、同行の社員と大笑いをした。海外駐在員に対する会社からの優遇された生活環境もあり、妻や子供たちも地域社会に溶け込み毎日が充足した生活だった。近所の肉屋さんでは、シャブシャブ用に薄切り肉を仕込まれたマイスターも妻には「紙のように薄く wie Papier ね」などと仲良しだった。

やがて帰国の日、ハンブルグ空港は多数の知人、学友、仕事仲間で滂沱の涙、悲しい別れだった。帰国後も、娘の小学校時代のオバアチャン先生は我が家に二度来訪、そのための家の改装すら行い、旧交の温め合いは続いた。仕事面でのドイツとの繋がり会社生活の終わりまで続いていた。あのドイツでの生活を wiederholen したいこと切である。

【写真説明 Hamburg Sethweg Volksschule 4年度卒業制作 エルベ川流域工業地帯調査、親は現場に連れて行くだけ、あとは子どもたちが独自に調査、工場や機械の模型を作って展示】



ドイツ留学で感じたこと

横幕 和幸

1988年3月から1991年9月まで、ミュンヘン工科大学のビール醸造学科に留学していました。講義受講、研究室での実習・実験、ビール工場研修等とあつという間の3年半でした。

ドイツでは、ミュンヘン近郊のフライジングから少し離れた5軒長屋の2番目に住んでいました。両隣の家族の方には、小さな庭を通じ交流があり、休みの日には、コーヒータイム、また、夕方には、お互いの家で食事会など。そして、休暇には近郊で散歩やサイクリング、さらに、イタリアでのキャンプなど。日本では到底体験できない様々なことを経験することができました。また、いろいろな家庭に招待されると、壁に絵が飾ってあり、こだわりの装飾、そして、お庭にはきれいな花。offの時間を家族、親友と一緒に、とても心豊かに過ごしていることを肌身で感じることができました。

日本に帰国したすぐのころは、逆にカルチャーショック。ドイツに戻ろうかと真剣に考えたこともありました。また、花を栽培し、花屋さんでもやろうかとも考えました。

しかし、数年たつと、日本のサラリーマン生活に。そして、6年前に群馬に赴任となり、自然豊かで、庭もきれいでガーデニングを楽しみながら、心豊かに過ごしている方が多いと感じ、定年退職後も群馬に住むことにしました。今後も自然、温泉、そしてより多くの皆様との乾杯を楽しみながら心豊かに過ごしていきたいと思っております。



ただ一度だけ

大熊 富吉

私が今までに出会ったワインの中に、これ以上のものはないであろうというワインがあります。おそらくそれは人生に一度のチャンスだったでしょう。そんなワインを、今から42年前のドイツ旅行の中で見つけたのです。

その頃の私はワインについての知識はまったくありませんでした。でも、ガイドさんの説明を聞いてとても興味をもちました。ガイドさんは、日本人旅行者に向かってこんなことを言いました。皆さんはとても運がよいですよ。1976年はヨーロッパは天候に恵まれ、100年に1度きり出ないような上品質ワインができました。今年は収穫後4年目なので、76年産ワインが店に出ています。皆さん、是非お試しを。そんな話を聞いたので、76年産ワインを求め、ミュンヘン市内のダルマイヤーというデパートの中の酒屋に入りました。特に目を引いたものは平たい丸い形をした瓶でした。フランケンワインというのだそうです。値段は42マルクなので高いなと思いましたが、せっかくドイツに来たのだからということで買うことにしました。栓抜きも必要と考え、店の人をお願いしたら、何と木製の値段の高そうなものを持ってきたのです。ああ、こんなんじゃあないんだ。日本によくあるような安いものでいいのに・・・。と思ったが、まあいいかとそれも買ってしまいました。これは日本に帰って2・3回使っているうちに壊れました。ドイツ製品は丈夫だと信じていたのに・・・。

ホテルの部屋でワインを開けました。大きな取っ手をぐるぐる回し、いよいよ味見です。開けたその瞬間部屋中に強烈な香りが広がりました。甘くて辛い、深いコクと味わい、ただならぬワインだったのです。2・3杯飲んでいっているうちに喉がヒリヒリしてきましたが、後味はとても良い。初めて最後のワイン、ああ、もっと買っておけばよかった。

娘とのドイツ旅行

田部井 欣司

知り合いの旅行会社に軽い気持ちでドイツ旅行の見積を依頼した。娘に「ドイツに行くかい？」と聞いたら二つ返事でドイツへ行くことになった。7泊9日で平成16年5月4日に成田空港から機上人となった。ウィーン経由フランクフルト行きで12時間の所要時間である。各訪問地での印象に残った事を報告したいと思います。フランクフルトでの夕食はホテルのレストランで、太いホワイトアスパラガスとジャガイモの料理を食べた。注文時に日本語のメニューがあるかと聞いたら飛んで行って持ってきてくれた。初めてのアスパラでした。5月4日からはミュンヘンまでのバス旅行です。ハイデルベルク城の見学で地下にあるワイン樽の大きさには度肝をぬかれ、そこでアイスワインを呑み、レストランで日本人好みのピルスナーで乾杯した。ハイデルベルク城はイギリス軍の砲撃に会い、修復しないでそのままにしてあった。その後はローテンブルクへ移動で、城壁上を歩いたり、市内見学をしたり、途中で初めてプレッツェルを娘の希望でお店で買った。只しょっぱいだけでおいしくなかった。今では大好きだ。5月5日はホーエンシュバンガウ城とノイシュバンシュタイン城を見学した。ノイシュバンシュタイン城へは観光バスは行けないのでご当地のバスで行く。5月6日はミュンヘンで終日市内自由散策だ。マリエン広場で仕掛時計の鳴るのを待った。5月7日には電車でザルツブルクへ。着く頃車掌が来たので乗車券を提示すると一人用だと言う。前の席にいたトルコ人がそれを見て一人分だと言う。ドイツ語での乗車券の買い方を知っていたのに、恥ずかしい。乗車券の不正乗車で割増金を取られるかと思ったら通常料金だった。一安心。到着後、タクシーを利用しモーツァルトの生家とザルツブルク城見学。モーツァルト広場ではグロッケンシュピールを見学した。5月8日はザルツブルクからウィーンへ電車で行き、その後は市内自由散策。5月9日シェーンブルン宮殿を見学した。この宮殿は、ハプスブルク王朝の歴代君主が主として夏の離宮として利用した。部屋は1,441室あり今は40室あまりが使用されている。帰りに乗車券を買おうしていたら変なおじさん来て乗車券を買ってやるという。小銭を出したら大きいのを出せという。おつりは持っていかれた。夜はご当地の「ヴィーナー レジデントオーケストラ」のコンサートを聞きに行く。ウィーンについて駅から上の道路に出たときモーツァルト時代のようなかつらを被ったおじさんがチケットを売りに寄ってきた。お金が無いと言ったら娘が「買ったら！」と言うので即買ってしまった。会場まで15分だと言ったが心配なので下調べに行ったら40分位かかった。通りがかりの人に聞いてもわからない。やっと見つけた。5月10はいよいよ帰国だ。心配なので早めに空港に行ったらその便は日本から来ないと言う。日本人の係女性が呼ばれて、買い物による税金の返金の手続きや代わりの便の手配をしてくれ本当に助かった。成田空港には無事！に到着。家路へと向かった。行きかえりの車はネットで予約し自宅まで送迎してくれるので大変便利だ。もう一度ドイツへ行きたいと思うが体力的に無理だろう。

鳴門市への訪問

針谷 琉維己

1. はじめに

私は、昨年十月に徳島県鳴門市にある鳴門市ドイツ館を訪れました。私の居住地である京都市からは車で二時間半ほどの場所に位置しています。鳴門市ドイツ館を知ったきっかけは、二〇〇六年に公開した、ここ鳴門市の板東俘虜収容所を舞台にした「バルトの楽園」を観たことです。「バルトの楽園」では、第一次世界大戦中の捕虜となったドイツ兵と収容所周辺の日本人住民との交流を描いた作品となっています。また、ベートーヴェン「交響曲第九番」が、アジアで初めて演奏されました。現在でも鳴門市とドイツとの交流は続いており、そんな当時の交流の様子を学ぶことができるのが、鳴門市ドイツ館なのです。今回は、鳴門市ドイツ館と、その周辺にある交流の痕跡をたどる旅の様子を皆様にお届けしたいと思います。

2. 鳴門市ドイツ館について

鳴門市ドイツ館は、JR 高徳線の板東駅を下車し、徒歩二十五分の場所に位置しています。街の印象としては、ひたすら田園風景と、ところどころに集落が広がっていました。そんな中を歩いていくと、写真のような鳴門市ドイツ館が見えてきました。また、鳴門市ドイツ館の横には「道の駅第九の里」が隣接しており、ドイツのグルメを堪能することができます。このように、鳴門市ドイツ館周辺の敷地は広がっているのです。このほかにもベートーヴェン像や収容所の所長であった松江所長の像が建てられており、来た人たちを楽しませてくれます。次に鳴門市ドイツ館内部を紹介します。しかし、内部は基本的に撮影禁止であるため、皆様に直接写真という形で伝えることができず残念です。内部は主に当時ドイツ人捕虜が暮らしていた様子を表した模型、捕虜や、その家族から提供された手紙や当時使用していたものが資料として展示されていました。また、鳴門市と姉妹都市関係であるリューネブルク市の写真展示がされていました。私が一番印象に残っているのは、ドイツ人捕虜による故郷の父母に送った手紙です。その中には捕虜としての異国での暮らしについて、不安や寂しい感情が綴られていました。当時、私とそれほど年齢が変わらなかったとすると、考えさせられるものがありました。



3. ドイツ村公園とドイツ橋

ドイツ村公園というのは、板東俘虜収容所跡地とドイツ人捕虜の慰霊碑などで構成されています。ここにはドイツ人捕虜が暮らしていた兵舎の基礎部分や、パン製造所の跡地、給水施設などが残されています。また、パンだけではなく、ドイツ人捕虜たちは多くの技術を持っていたとされます。中にはビール職人や精肉を専門とする捕虜たちもいたとされています。収容所という非人道的な扱いといった悪いイメージを持ちがちですが、松江所長はかなり自由を認めていました。兵舎に関しては、四棟分の基礎部分が残されていました。すべてはレンガでできています。少し洋風な印象を持ちましたが、レンガの上は木造であったとされています。

ドイツ橋とは、ドイツ人捕虜たちが設計した石積アーチ橋のことです。場所はドイツ村公園の北にある大麻比古神社にあります。私が訪ねたときは、七五三祝いで多くの家族連れでにぎわっていました。また、神社の中に洋風の建築物がみられるのは、とても興味深いものでした。

4. 最後に

今回、私は鳴門市へ訪問しましたが、日本とドイツには切っても切れない関係があることがわかりました。これからの両国の友好、発展を願うばかりです。

ドイツ音楽に魅せられて

小田原 由美

2018年群馬日独協会創立30周年コンサートの折には息子と一緒に出演させていただき、ありがとうございました。最近のご無沙汰をお許しください。私は群馬交響楽団に入団と同時に1976年より群馬県人になりました。群馬交響楽団にはヴァイオリン奏者として10年間在団しまして、その後セシリア弦楽四重奏団第1ヴァイオリン奏者、群馬室内合奏団コンサートミストレスとして約15年活動しました。2003年関東一円の演奏家の仲間たちと群馬を本拠地に「カメラータ慈音（ジオン）」を創立しました。なぜ群馬を本拠地にしたかと申しますと、それは群馬のお客は、群馬交響楽団を聴いて育った為でしょうか「本当に音楽が好き！」な方が多いということからです。厳しくも音楽のお好きな方々が「カメラータ慈音」のお客様です。そのような方々に育てていただいています。

自己紹介から離れますと、日独協会に参加させていただこうと思ったきっかけは息子が「ホルン奏者になる」と言い始めたからです。「ホルンときたらドイツ、ホルン奏者になるのならドイツに留学することになるかもしれない。」そのような思いで参加させていただきました。わたくし自身がドイツの音楽が好きである事も勿論でした。

私は、オーケストラの楽器の中ではホルンが好きです。ホルンはドイツ特有の広大な森の中で狩りをするには欠かせない合図の音であったようですが、オーケストラの曲の中では「オーケストラの魂」と呼ばれるほどそのあたたかで美しい広がりのある音色で重要なメロディーを演奏したり、力強い金管群としても大活躍します。息子を通してブラームスのホルン三重奏曲やフランツ・シュトラウスの（リヒャルト・シュトラウスの父）の素晴らしい曲も演奏するようになりました。フランツ・シュトラウスの「ノクトゥルノ」これはホルンソロの名曲ですが、ヴィオラで演奏するのうってつけの曲と思い、今では私の大事なヴィオラのレパートリーになっています。よくよく調べてみますと、フランツ・シュトラウスはホルンの名人だったので若かりし頃ヴィオラも弾いていたのです。

バッハ、ベートーヴェン、ブラームス、シューマン、シューベルト、メンデルスゾーン等々の素晴らしい作品が現代に残され、その残された楽譜を手掛かりに作曲家たちと対話しながら演奏できることはなんと幸せなことでしょう。私も少しでもその偉大な音楽に近づけるように歩み続けたいと思っています。

「カメラータ慈音」は来年20周年を迎えます。その大きな柱は、“若い芽のコンサート in ぐんま”です。若き演奏家のお役に立ちたいと継続してきました。今年の8月23日（火）にも開催いたしました。

前橋出身の既にコンクール入賞歴のあるヴァイオリンの黒岩美音さん（20歳）、オーボエの本田正輝さん（22歳）が出演し、特別ゲストとして澤田まゆみさんにも演奏していただきました。すべてモーツァルトの協奏曲です。カメラータ慈音4年ぶりの室内オケとしての協奏曲のコンサートでした。



来年の20周年コンサートに是非、
皆々様お出で下さい。
ご来場を心よりお待ちしております。



ドイツが生んだ二人の物理学者

天田 義乃利

人類史上、力学を革命的に発展させたニュートン、及び電磁気学の礎をきづいたファラデーとマックスウェルを生んだのは、産業革命後の英国でした。その後の十九中～二十世紀の物理学の発展、乃ち現代の科学技術の根っこの部分は、アメリカに移るまで、理論と実験面においてドイツが担うことになりました。それは、原子爆弾の開発、アポロ十一号の月面着陸へと科学の功罪に繋がりました。その中で、小生が歴史上、最も尊敬して止まない二人のドイツ出身の物理学者がいます。

一人目は、百二十二年前に、エネルギーは不連続の飛び飛びの整数倍で変化する粒子であること、物質にはそれぞれ固有の振動数を持っていることを発見し、量子論の創始者の一人となった Max Planck です。その評価は今のマックス・プランク協会 (MPG) に結実している。

二人目は、百七年前に、重力場における時間・空間の歪みを、リーマン幾何学を用いて明らかにし、ブラックホールや重力波の存在を、自ら作り上げた一般相対性理論から予言した Albert Einstein です。その科学的業績は言うまでもなく、偉ぶらず、飾り気がなく、清廉で大変謙虚な人柄でした。そして、徹頭徹尾平和主義者であったこと及び音楽を終生愛したことも、尊敬の大きな要素です。プランクはピアノを、アインシュタインはグアルネリのヴァイオリンを弾き、それぞれの名手で、物理学を専攻しなかったら演奏家になったかもしれません。プランクは、また登山を好み七十二歳でユングフラウを登っていることも、親しみを感じる要素です。小生も、日本山岳会の会員で、「玉村山の会」の代表をするほど、登山を趣味としています。

ドイツ観念論の仕上げをしたヘーゲルがとなえた aufheben (止揚) の概念を地で行った。

(日本の誇る真言宗の開祖・空海は、既に千二百年も昔に、「秘密曼荼羅十住心論」で表しているように、aufheben の境地に達していた)

ニュートン力学を真っ向から否定するのでなく、その限界を知りその上に積み重ねて光速上の力学を完成したアインシュタインであったこと。さらにその系譜は、理論物理学者でもある元首相メルケルへと紡いで行ったと私は思う。それは、アウシュビッツへの訪問と献花に現れている。勿論、ヒトラーを生んだ負の遺産もあるが、ドイツはそれらから目を背けず、きちんと向き合い検証し、それを継続しているドイツの歴史教育は、素晴らしい印象を、私は抱いている。臭い物に蓋をするいづこの国と、行って帰ってくるほどの違いがある。

漱石が百十一年前に表した「現代日本の開花」の中で、西洋の文化文明に追いつけ追い越せで、速足の計でやらざるを得なかった日本について、いみじくも「皮相上滑りの開花であると云う事に帰着するのである」と言っているように、百年を経てどうにかこうにか西洋に追いついて来たように思いますが、学術・人権・物の考え方など、真面目に学ぶことがまだまだ多いと、私は考えています。特にドイツからは。その一つとして、就労時間は、日本に比べ二十五%も少ないのに、一人当たりの GDP は日本より三千ドルも多いのだから驚きます。その生産性のカラクリを、謙虚に学ぶ姿勢は必要だと思う。

六十五歳となった今、誰に追われることなくマイペースで、勉強できる時間を得たので、もう一度、一般相対性理論を理解する上で必要となるリーマン幾何学の研究を始めています。頭が、まだはっきりしている間にどこまで到達できるかわかりませんが、楽しみながら勤しんでいます。

ドイツを訪れ、マックス・プランクとアインシュタインの足跡を、早晚たどってみたいと思います。結びに、小生が後生大切にしているお二人の語った言葉を記して終わります。

マックス・プランク「When you change the way you look at things, the things you look at change.」

あなたが物の見方を変える時、あなたが見る物は変わる。

アインシュタイン「The important thing is not to stop questioning; curiosity has its own reason for existing.」疑問を持ち続けることが大切だ。好奇心の存在には理由がある。

ドイツ ロンネフェルト紅茶との出会い

鈴木 剛一郎

平成7年11月に陶豆屋(とうとうや)は創業しました。屋号の如く最初は陶器と珈琲豆を扱う店としてスタート。その後ドイツ ロンネフェルト紅茶と出会い、流れは一気に紅茶屋へ・・・

ドイツ気質のクオリティー重視のロンネフェルト紅茶は私の生き方をも変えました。その当時、全国でもまだ5軒しか取り扱いを認められていなかった頃、群馬でも珍しい紅茶屋誕生と新聞に取り上げられ、その記事をきっかけに鈴木会長より声がけいただき日独協会入会になりました。

日独協会をはじめ、紅茶ファンつながりで本当に多くの方とお知り合いになれたのもこの紅茶のおかげです。ロンネフェルト紅茶は1823年に創業。2023年には創業200年となります。2世紀の長い間絶えることなく継続、こだわり一筋と思います。世界中の高級ホテルで利用され日本でも東京ディズニーランドホテルやヒルトンホテル、椿山荘、大阪リッツカールトンでも提供。ホテルでは飲料はできますが茶葉の販売はありません。私の店はロンネフェルト紅茶の茶葉販売部門に位置しています。現在全国で12軒ある認定店のうち、茶葉の量り売りができる店は4店のみ。その4店の中でも約100種の茶葉を取り扱い日本で一番の規模となっています。この茶葉を求めて全国から直接足を運んでいただくお客様も多数いらっしゃいます。また私はロンネフェルトが認めるティーマスターゴールドという日本人では18人のみが取得したタイトルがあります。ロンネフェルト紅茶のことでしたらどんなことでもお応えします。

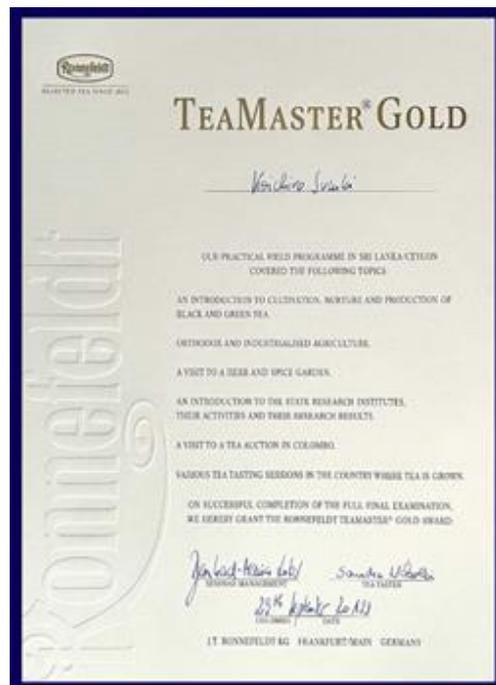
世界の7ツ星ホテルでも使われている紅茶です



SELECTED TEA SINCE 1823



そして毎月第1土曜日開催のドイツサロンも当店ギャラリー会場を拠点に多くのドイツ関係者にお越しいただきました。コロナが落ち着き、再開できることを楽しみにしています。



ゼンパーオーパーにて

矢内 史

オペラファンの私はドイツやオーストリアの歌劇場を訪問することを無上の喜びとしております。オーソドックスなオペラを愛好する私は、例えばTシャツ姿のミミやビジネススーツを着たドン・ジョバンニは勘弁！と言うのが本音ですが、ドイツ人はどうやら解釈の斬新さに高い評価を与えるようです。

何年か前にゼンパーオーパーで「さまよえるオランダ人」を観たことがあります。第二幕で舞台の上に二十台ほどのベッドが並び、ベッドの上に妊婦が勢揃いしたシーンには度肝を抜かれました。客席にざわめきが走りました。乙女が糸を紡ぐ、というのが通常の表現なのですが、生誕すなわち生命を紡ぐ、という解釈なのでしょうか。乙女が糸を巻きながら轉るという陽気な場面ではなく、臨月の妊婦たちの生むという神聖でありながらも直截的で原始的な行いを想像させる演出は私には馴染めないものでした。

その舞台で観客の一人が発作を起こしたのでしょうか。突然倒れました。誰かが「Arzt！」と叫び。客席から三名の、おそらく医師が病人に駆け寄り手当をしていました。その間、舞台の上の歌手たちもオーケストラの団員たちも、そして観客たちも全く動揺することなく、舞台は中断することなしに進行しました。ざわめき一つない静謐な推移でした。

劇中のアリアはさすがに素晴らしく傾聴に値するものでした。スタンディングオベーションも少なからず、成功したオペラなのでしょう。観客たちの拍手は盛大でした。その熱狂の中で私は違和感を感じながらも、不思議な体験のオペラの日に満足していました。

同じ夢を見た異邦人達

澤田 洋海

世界有数の巨大油田開発のジョイントベンチャーで働くためにアラブ首長国連邦のアブダビに赴任した。日本、アメリカ、アブダビの共同プロジェクトカンパニーがアメリカのシステムで運営されたことは唯一人の日本人だった私にとって幸いだった。クリスマス休暇の直前に秘書のファイザが言った。「夏休みの予定を提出していないのはあなただけ。」冬休みの前に翌年の夏休みの日程を提出しなければならぬのだ。しかも40日の夏休みは「必ず」消化されなければならない。ファイザの大きな目が私をにらむ。私は彼女の素顔を知らない。敬虔な回教徒の女はカンドゥーラで顔を覆い隠す。隠さなければそれほど見たいとは思わない。想像は現実を超える可能性を想起させる。禁止は欲望を刺激する。

その夏はオーストリアに行った。この旅行のことはほとんど憶えていない。ただ一つの例外がある。世界で最も美しい湖畔の町ハルシュタット。その湖畔にたたずむ古いホテルは息子夫婦に引き継がれた。その老人と廊下で目が合った。先代の館主が私にドイツ語で語り掛けた。「日本人か、中国人か」「日本人です」彼は微笑むと手招きした。窓のない暗い隠居部屋の壁には軍の勲章が飾られていた。古い写真には美しい若い女が映っていた。微笑んでいる。奥さんなのだろうか。故人なのだろうか。彼は壁の一つ一つのアイテムを指さしては説明した。ドイツ語だから理解できなかった。それでも話は続いた。そして突然声を詰まらせてそれは終わった。長い沈黙。涙を拭くと彼は私に帰るように促した。

誇りをもって語ることができない歴史がある。彼は話したかった。でもできなかった。ようやく話し相手が見つかった。私。それは私が日本人だから。彼は日本人と一緒に戦った。そして負けた。あの目を忘れない。古い友人にでも向けられたような目。これは世界で最も美しい湖畔の町で起こった出来事。

独との出会い

菅野 久実子

独との出会いは2013年、旅のヨーロッパデビューが「独のクリスマスマーケット」のツアー参加に始まります。「食」が専門なので旅先の決定はその国の食文化も大事にしています。「グリューワイン・ドイツパン・ソーセージなど、もちろんお菓子も」

2017年夏に訪れた時の旅の絵日記からのスケッチです。森林浴、ウォーキング、トレッキング、自転車、乗馬、読書してる人森林の中に生活が溶け込んでる。じぶんりゆうに森林を楽しんでいる感想をもちました。



読書する人

2017年冬は独の人々が表現する「黒い森」とはどんな森なのだろうか？ と思い出かけました。また「黒い森」を表現したケーキがある？!!



黒い森スケッチ



黒い森ケーキ

今年度のぐんま日独協会の研修テーマが「日独の森林」と知り、

①旅で感じた日独の森林との関係は？

②地産地消の建材の我が家、群馬の森林は？

そんな興味をもって今年度「日独の森林」の勉強をさせてもらっています。

オードリー・タンそしてSGDsについて

水尾 謙作

オードリー・タンそして、SGDsについて、お話してみたいと思います。

オードリー・タンについては、今や世界的に有名になっているのでご存知の方も多いと思いますが、どうしてそれが有名かと、先日本屋で見かけた本、『まだ誰も見たことのない「未来」の話しよう』オードリー・タン（語り）、を紹介したいと思います。

オードリー・タンは、現役プログラマー、中学校を中退し、スタートアップ企業を起こし、19歳の時にはシリコンバレーでソフトウェア会社を企業。トランスジェンダであることを公表。35歳で史上最年少で、行政院（内閣）に入閣。コロナウイルス禍においてマスク在庫管理システムや、そのたのシステムで多くの実績を挙げ、大きく貢献している。デジタル民主主義の象徴として世界にその存在を知られる。

そして、彼は、入閣の時、林全行政院長（日本の首相に相当）に対して三つの条件を提示しています。
①行政院（日本の内閣と各省庁を併せてたものに相当）に限らず、他の場所で仕事をしてもいいこと、
②出席するすべての会議、イベント、納税者とのやりとりは、録音や録画をして公開すること、
③誰かに命じること命じられることもなく、フラットな立場からアドバイスを行うこと、です。行政院長はすぐに、「問題ないですよ」と言ってくれたそうです。

オープンデータ・ソースを求め、誰も取り残すことのない社会（インクルーシブ・包括的）を創る。世界共通の価値観を達成。国境を超えた世界のルール設定にかかわってきた。私たち（彼は）自由にオープンデータを追求する。どんな権威主義にも抵抗する。それは言論の自由が支持されていなければならない、と言います。

また、かれは、SDGsについて発言しており、彼の行動と思いを追求すればするほど、SDGsを説明することになります。

Q：貧困、子どもの虐待、地球の温暖化、戦争など、さまざまなニュースを見ると、世の中がどんどん悪い方向に進んでしまうような気がします。

これから社会のために私たちができることなんてあるのでしょうか。

の問いには、

A：ニュースが報じているのは、「結果」で、それを変えるのはほぼ不可能です。一方で「問題が発生する前に防ぐ」能力は、すべての人に備わっています。

Q：自分がすべきことをどのように見つけていけばよいかわかりません。

A：まだ鳴ることのできる鐘を鳴らそう。

このようなコメントを頂いた時は、彼は、

レナード・コーエンの歌『Anthem』の一節で、筆者拙訳：

まだ鳴ることのできる鐘を鳴らそう

完璧さを求めるのは忘れよう

すべてのものには裂け目がある

裂け目があるからこそ、そこから光が差し込むことができる
本書を読む人が一人でも多くの方が未来に希望を持てるようになり、
私たちと一緒にこれからの世界を創ってくれる方が生まれたらうれしい、
と結んでいます。



ドイツの仕事と日常

吉田 博文

ハイマート 60 号おめでとうございます。

今日はドイツで会社に勤務していた時の経験について書かせていただきます。

私が 28 年間勤務していた、ピアノ会社(Schimmel Piano)は、歴史は古く、ドイツ、西ヨーロッパ最大級のピアノ会社でした。1日にアップライトピアノ 50 台、グランドピアノ 17 台を生産する中小企業で、従業員は 500 人くらい働いていました。生産全体の 60%は輸出、40%は国内販売でした。

私が勤め始めたのは 1981 年。ピアノ製造の工程は非常に複雑で、一台のピアノが出来るまでには沢山の時間が必要です。私の担当は最終仕上げ部門で、整調、整音、調律、私は周囲の音が入らないように防音の設備のある部屋で調律の仕事を行っていました。

朝は 6:45 に仕事が始まり、8:45-9:00 までの 15 分間は朝食で、家から持ってきたパンとコーヒーです。12:00-12:30 が昼休み、休みは 30 分しかなく、ほとんどの人が社員食堂で済ませます。そして 15:30 には仕事が終わりました。主に午前中に集中して仕事を終わらせるといった感じです。終了後 5 分も経つと会社の中はガラガラになり、啞然とします。みんなすぐに帰ってしまいます。まず残業はありません。1 分でも会社には長くいたくないという感じでした。仕事後は自由の時間を楽しんでいます。自分の趣味、クナイペ(居酒屋)、ガーデニング、家族との時間など色々に楽しみ方はあります。生活にゆとりがあるのかな？

夏は 21 時くらいまで明るいので本当に色々なことができます。休日もたくさんあり、土日祭日はもちろん、夏休み 4 週間、クリスマス～お正月は 2 週間、オースターは 1 週間くらいです。

当時は一番景気の良い時で、今とは少し違いますが、その頃はヨーロッパの中でもドイツは給料も良くいただきました。しかし独身者は税金、健康保険、失業保険その他で 50%くらい引かれてしまい、明細書を見てびっくり！手取りは半分になっていました。

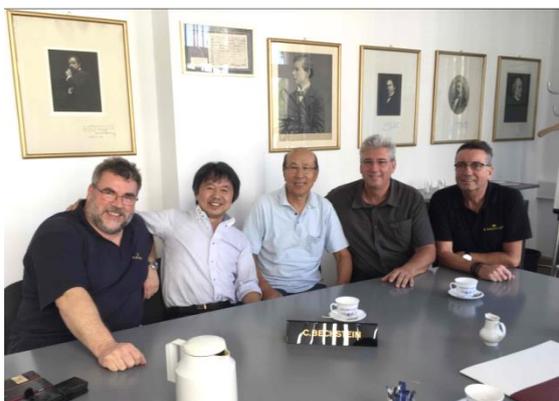
それからなんと会社内での仕事でのビールは許されていました。それと同僚の誕生日会も月 2 回くらい、アルコール付きで仕事に行いました。自分の誕生日の時はみんなに振る舞わないといけません。30 人分くらいのビール、ゼクト、パン、ハム、チーズなどを持って会社に行くのです。ですから、自分の誕生日は憂鬱でした。

余談ですが、こんな事もありました。会社がテレビの 1 時間の特集番組に取り上げられ、出演したこともあります。オランダにあるテレビ局に行き録画撮りでした。

個人的には、それとは別にテレビ番組での服部半蔵の記録映画があり、サムライの切れ役で 1 週間スタジオ入りして、撮影しました。DVD 販売もされたりで、これも楽しかったです。

今は色々な規制が増え、会社 Schimmel も中国の資本が入り、内容は大分変わったようです。

朝早くから仕事が始まるのは今でも同じで、ドイツやヨーロッパの特徴だと思います。



Schimmel で一緒に働いた同僚の写真と娘夫婦との家族写真です

ドイツ・ドイツ語・ドイツ人

品川 和男

【ドイツ語】

ドイツ語との出会いは、大学時代に第二外国語として選択してからです。1回生の夏、6か月分出た育英会の奨学金を元手にオリベッティのタイプライターを購入しました。Eszett や Umlaut 付きを特注しました。大学卒業後、群馬県の公立高校理科教諭になりました。ドイツ語への関心は、細々ですが続いていきました。1983年から2001年まで、高校で授業の一つとして「必修クラブ」が週1時間あったときには、「ドイツ語クラブ」を作って生徒たちとドイツ語を学びました。NHKのラジオやテレビのドイツ語講座も時々聞いていました。本格的に勉強しようと思ったきっかけは、息子がドイツ人女性とお付き合いを始めた2007年頃からです。いくつか参考書を買ってみたのですが、「しっかり身につくドイツ語トレーニングブック」(ベレ出版)で丁寧に学習した結果、かなりドイツ語が解ってきました。

【ぐんま日独協会】

ぐんま日独協会には2017年に入会しました。ドイツサロンに何回か参加し、11月にはドイツ語講座高崎教室に加わりました。以来、4年半ドイツ語を勉強しています。途中から妻も加わりました。コロナが流行り始めた2020年2月までは、高崎の陶豆屋さんで対面で学習していました。2020年6月からはZoomでの学習会に移行しました。講師の松永先生が、今年の3月で高崎商科大学を退職し郷里の兵庫県宝塚市に移りましたが、オンライン形式なら続けられるということで、今年の5月から新規にスタートしました。

【ドイツ語学習会】

ここで、ドイツ語オンライン学習会について紹介します。独作文と独文解釈の2本立てで、テキストは現在次のものを使っています。

独作文：「ドイツ語作文400題」(朝日出版社) 独文解釈：「Menschen in DACH」(朝日出版社)

原則、月2回で第2、第4日曜日の午後2時から午後3時30分です。

独作文は、1人1文を担当し、小型ホワイトボードに書いたものを掲示します。独文解釈は1人2文を担当します。初級ではないですが、興味のある方は是非参加してください。

【ドイツ旅行】

2018年の4月から息子夫婦がドイツのミュンヘン近郊で暮らし始めました。私たち夫婦は、2018年12月の下旬、8泊10日でミュンヘンを中心にドイツ旅行に行ってきました。ミュンヘン、ザルツブルク、ランツベルク(息子のお嫁さんの実家がある)、フュッセンなどをめぐり、オペラ「魔笛」の鑑賞、ノイシュバンシュタイン城、ダッハウの強制収容所跡、美術館、ドイツ博物館など様々な観光を楽しみました。



私とドイツ

原 鏡

私が最初にドイツに惹かれたのは、音大受験から卒業後まで師事したピアノの先生がご夫妻で長年ドイツで演奏活動され、奥様の美しいドイツ歌曲と伴奏なさる先生の豊かな音色に魅せられた事です。また、ウィーン留学の際、独語の個人レッスンをして下さったのが現副会長の田口久美子先生です。50歳を過ぎて、東京・東久留米にある「聖グレゴリオの家宗教音楽研究所」で5年間学び、ドイツ教会音楽家の国家資格を取得。所長の橋本周子先生はケルンでキリスト教音楽を学ばれ、帰国後、レーゲンスブルク音楽大学と提携を結び、日本にいながら本場ドイツの教会音楽を学べる場を作り、国家資格を取得できる道を拓いて下さいました。設立に当たってドイツ各地の修道院や教会から多大な援助があったそうです。今もオッテリエン修道院との交流があり、私も参加しています。また、宗教改革を起こしたルターと、ルター派教会のバッハを巡る研修旅行に参加し、徳善義和先生（ルターの著作多数）のもとで深い学びが出来た事は一生の宝です。若きルターが修業したアウグスティヌス修道院の小聖堂や、バッハが結婚式を挙げたドルンハイムの教会で、パイプオルガンを弾かせて頂いた事は良い思い出です。

そして、ぐんま日独協会への入会。パイプオルガンによるクリスマス・コンサートを主催して下さい、また、ドイツ・フェスティバルで「コール・詩音」の演奏の機会を何度も頂き、大変嬉しく光栄です。これからも皆様との交流を通じてドイツを身近に感じていたいと願っています。

どうぞよろしくお願い致します。

ドイツ生活での旅の思い出

横塚 千代子

1994年から5年余駐在員の夫と共にデュッセルドルフに暮らしました。私は初めての海外生活、言葉の壁はあるものの、旅好きな性格、片言のドイツ語で、案内書片手に身近なお城、美術館、博物館等訪ね歩きました。新しく出会った駐在員の奥様方とも交遊し、ツアーバスで近隣のお城、教会等を訪れる日々を過ごし、日本からの親類、友人も来独し共に旅を楽しみ感激して帰国したものです。

ドイツのユーレイルパスも購入し、列車の旅も楽しみました。車窓からのなだらかな緑の丘、走っても走っても美しい風景！に感動ひとしおでした。ある年の夏、夫の家族4人を連れて6人で南ドイツを旅しました。オーバーアマガウの絵本の様な街道、皆大喜びでした。チロル国境のツークシュピツェ山2262mの登山も思い出深い旅でした。登山鉄道とロープウエーで楽々と山頂に立つ事が出来、360°ドイツアルプスの山々を眺め皆感激で言葉を失いました。頂上に白い大型犬がゆったり座っていた姿が一幅の絵の様で脳裏に刻まれております。1998年夏、来独した息子をつれバイエルン州のベルヒデスガルデンを訪ねました。標高700mの山上にあるヒトラーの山荘として知られています。地上から金張のエレベーターで山頂へ、そこは美しい高山植物の花々が咲き乱れ、山頂の人々は誰ひとり言葉を発せず初夏の風に身を委ねておりました。何年経ってもあの日の衝撃は忘れられません。後日談ですが、昨年NHKBSTVの映像の世紀を見ておりましたら、フランスの有名なワイナリー“イギリス王室御用達”のオーナーが語っておりました事、大戦時下、秘蔵の赤ワインを大量没収されたとの事、戦後程なくして彼はベルヒデスガルデンを訪ね物色したところ、かなりの赤ワインを見つけ持ち帰られたとの事、テレビを視ていた私も良かった！と手を打った事を憶えております。

「日本百名山」独訳のこと

深田 勝弥

表題の本を私の拙い翻訳で本会の機関誌「ハイマート」に連載して頂き、恐縮に、ありがたく思っております。今般これを機会に、亦一筆書かせて頂きます。

偶々故郷の町にある資料館「山の文化館」に係わっておられる方から、この本をドイツ語に翻訳することを勧められて逡巡していた頃、2015年の暮れ朝日新聞にこれの英訳版発刊の記事が出ました。翻訳者は日本で登山などを楽しんだ英国人で「国内外の出版社に持ち込んだが断られて、ハワイ大学から出版された」とのことです。仮に英語で読む人は少ないとしても、ドイツ語なら一人くらいは読む人もいるだろうと、浅学菲才の私が挑戦した次第です。

しかし原文章には長い文が多いので、訳文も長くなり、訳者の私でも理解できない有様で、そんなときは著者自身も同じ苦勞をただらうと自ら納得して辞書と格闘しました。幸いにも著者は毎月二座ずつの山を書くことを編集者と約束していたので、私もそのように焦らず進められました。それで丁度、五年後に下書きができて、これを山の文化館へ送り、本会へも報告しました。

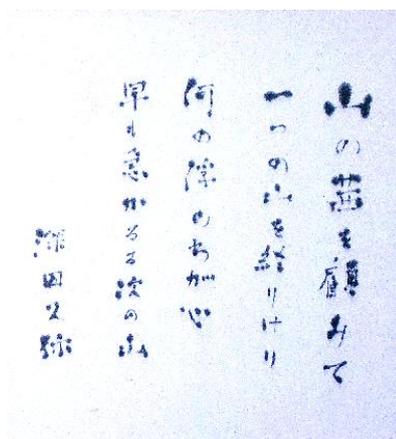
文章もさることながら、引用されている詩歌がむつかしく時間がかかりました。ドイツ語の詩は一行の中の音節の強弱を規則的に並べることでリズムを作りますが、日本の詩歌では五、七の音節によってリズムを作ります。日本の詩が読む人の自国語で書かれているとしても、その人は五、七のリズムには気付かないことは当然の事でしょう。然し私は日本の昔からの詩歌の五、七調を気付いてほしいと思っています。そこで無駄な努力と知りながら、詩歌はできるだけ音節の「五、七」と、できれば強弱も併せて考慮するように時間を懸けました。

参考に久弥が頼まれて色紙に書いた詩を紹介します。

山の苗を顧みて一つの山を終りけり 何の俘のわが心早も急かるる次の山

Zum Abendrot überm Berg zurückblickend, bin ich mit dem Aufstieg fertig.
Was begeistert mich für Berg? Das drängt mich bereits zum Nächsten.

これで退職後の暇つぶしの心配もなく過ごせるのは久弥との縁の深さとしみじみ感じている今日この頃です。



ヨーロッパの思い出

遠藤 功

私は、1997年10月に会社の命を帯びて単身でオランダ南部のベルゲンオプツームに赴任いたしました。ここは私が奉職した会社の親会社である米国GE（ジェネラルエレクトリックカンパニー）のプラスチック部門のヨーロッパの一大拠点でした。GE社は天才エジソンが創始した総合電機メーカーから始まり、このころは私が所属していた化学系のプラスチックなどを含め、冷蔵庫・発電機・原子力・ジェットエンジン・医療機器などのメーカーでありながら、TV放送局や保険事業などまで手を広げた超グローバルでかつ数多くの企業の経営モデルと称された事業体でした。ここで私は、もう一方の親会社である東芝との合弁会社で、その強みとしていた電気電子用や自動車用製品の新規市場開拓のため派遣された訳です。当時日本はこれらの分野で向かうところ敵なしの状態、主要なヨーロッパの製造業者は大いに関心を持って迎えてくれました。彼らとの商談は11時頃から始まり、お昼は会社のレストランでワインを飲みながら2時間程度の豪華な食事を楽しみ、その後17時ごろを目安に厳しくも優雅に行うのが慣例でした。特に夏場の日が長い季節はちょうど太陽が傾きだす20時頃まで続くこともあり、それからさらに3時間程度車を運転して帰宅すると23時頃の薄暮になるという感じでした。平均身長1.9mのオランダ人の体力に伍していくためには、日本で鍛えた超過酷な残業時間を熟してきた自信と体力、及び秋田産の親譲りのアルコールの耐性があっての事と思っております。

このころは、オランダを中心に、隣のベルギー・フランス・ドイツなどは、車で3時間程度の距離でしたら迷わず日帰り出張で、日本ではちょうど隣県に出かけるような感覚でした。そして国境は完全に開放されて自由でしたが、ユーロはまだ導入されておらず、財布には常に自国ギルダー通貨の他に、ベルギーフラン、フランスフラン、ドイツマルク、イギリスポンド等を1万円程度は常に揃えておりました。カードは便利でしたが、高速道路の違反金の即座の支払いや、当座の少額の支払いは現地通貨のみという場合があるためでした。特にトイレはチップや有料でかつコイン投入式等もあり、各国コインの携帯も重要なノウハウでした。またその換算も常に最新のレートを頭に叩き込んでおき、瞬時に日本円に換算して高低を判断して買い物をしておりました。これらの感覚は島国の日本人ではなかなか習得でき

ないもので、彼らの生まれながらの感覚の様で、全く違和感を持っていないように感じられました。しかし今から思うと島国根性の私のようなものがよく真似ができたなと思っております。

先日机を整理したら、当時のヨーロッパ9か国のコインが多数出てきてしまい、処理に困っておりました。最近地球儀を基に外国の名前を覚えることに大いに興味を持ち出した日本在住の孫は、一瞬は興味を示したようだが無価値と知り拒否されました。一方コロナ禍で長いこと一時帰国がかなわなかったドイツ在住の孫がこの夏には帰国予定ですが、彼らの過去の遺物に興味を持って貰えることを密かに期待しております。おそらくドイツの子供たちも博物館はともかく、これらの過去の記念物を身近で手に触れる機会もすでに無くなっていると思われまますので、私の思い出の品と彼らの宝物が共有されることを願う年になったなと思うとともに、これら内容が昔の思い出の域に達しつつあることを実感するようになった自分を一瞬感じた次第です。



旧東ドイツのアイゼナッハにあるDie Wartburg（バルトブルグ城）です。1998年ごろと思います。町はまだ旧東ドイツの面影を残しており、屋根や外壁は補修が不十分で一様に古いイメージでしたが、和やかで落ち着いた雰囲気を感じられました。西ドイツとの国境に近い町で、東西の格差の大きさに驚いたものでした。

遠藤技術士事務所 (IETECHNO) 技術士 (化学部門) 遠藤 功 (Isao ENDO)

「山」と「Heimat」

頌彦 守真(うたさと もりみ)

初めてヨーロッパの地に足を踏み入れた時、私は神様にこう尋ねました。「どうして綺麗なものをすべてヨーロッパに集めたのか」と。あれから40年が過ぎました。

台湾の港町である高雄市で生まれ育った私は、山とは無縁と言っても過言ではありませんでした。小学生の時、音楽が大好きな祖父に映画「The Sound of Music」を見に連れて行ってもらったことで、初めて「山」を意識しました。映画の冒頭、主人公マリアが丘を登りながら歌うシーンや、終盤でトラップ一家がオーストリアからアメリカへ逃げるために、アルプスを登るシーンは非常に衝撃的でした。また、修道院の院長がマリアに歌った「すべての山に登れ」は私の愛唱歌となりました。

大学卒業後、勉強のため、オーストリアで5年間を過ごしました。滞在中、他の留学生と何度か山の中にある教授の別荘にお邪魔したことがあります。夏は木々の香りを愉しみながらのお散歩、冬には暖炉の側で、窓越しに雪を被ったモミの木を眺め、映画のワンシーンのように楽しませてもらった記憶もまだ鮮明に残っております。

ある夏休み友人に誘われ、彼女のスイスに住む叔父の家に遊びに行きました。その方は牛を飼育しチーズを作っていました。私は初めて山で牛に触れ、手作りでチーズの生産を見学しました。山は彼らにとってとても大事な資源なのだと教えられました。一日中、広大な山の麓で遊び、最後にチーズ小屋へ案内された時のことです。「好きなように食べていいんだよ!」と言われ、小屋のドアが開いた途端、私は目眩がしてしまいました(笑)。様々なチーズの“強烈な香り”に驚いてしまったのです!私にとってそれ以来チーズの香りが“stinkt”な匂いとなってしまう、今でもちよっぴりチーズが苦手なのはここだけの秘密です。(笑)

結婚後日本に移り住み、そしてご縁があって群馬県民として早くも32年が経とうとしています。昨今のコロナ禍において、今までのように旅行ができない日々が続く中で、ふと思いついたのです。“自然”と触れ合ってみようと。それから群馬の山に出かけるようになりました。尾瀬のあやめ平、妙義山、子持山、鍋割山、三国山など。登山中いつも「The Sound of Music」中の曲「すべての山に登れ」を口ずさみながら一步一步進んでゆきます。山登りの辛さも毎回味わっておりますが、頂上に辿り着いた時の達成感と解放感は登り切った人しか味わうことができないもので、すっかりやみつきです。

海に囲まれて育った私は、こんなにも「山」を愛することになるとは考えもつかないことでした。今、私は神様にこう思います。「目を向ければ、至る所にあなたの偉大な作品があることに感謝致します。」

オーストリアに私の忘れられない大事な時代、懐かしい「Heimat」がありました。今こうして、ぐんま日独協会を通じて、その大事な時代を再び感じることができ、そして、交流を通して、ドイツ語とドイツ文化に懐かしいあの「Heimat」が宿っていることに気づかせて頂いている今日この頃です。



素敵なおもちゃの作り手と使い手の架け橋に

黒田 桂子

群馬県前橋市生まれ。群馬銀行退社後、前橋中心商店街で今年創業 100 年の前橋中央通り商店街「黒田人形店」の三代目の嫁となりました。

先代はひな人形製造販売、二代目からは人形と一般的なおもちゃの販売、三代目の嫁の私がドイツを中心としたヨーロッパの木のおもちゃに魅了され輸入を始めました。夫と四代目になる次男と共に、ヨーロッパの木製玩具から節句人形・一般玩具・キャラクター・フィギュア・ドイツカードゲーム・ボードゲームまで幅広い品物を扱う全国でも珍しい、おもちゃと人形の専門店です。



2000 年頃、玩具が子供の成長に重要な影響を与えることに気づき、本格的におもちゃについて勉強、おもちゃコンサルタントマスターの資格を取得しました。ヨーロッパ製の木製玩具の販売を始め、現在まで遊びやおもちゃを通して子供の成長を支援する活動を多数行っています。



ドイツのおもちゃメーカーや工房には数十か所訪れました。経営者が子どもに対するとらえ方が実にしっかりしていて、「子どもたちに最良のおもちゃを提供する事を誇りに思っている」とおっしゃっていました。製造にかかわる従業員の方やデザイナーにいたるまで、「子ども達の最良のおもちゃを作る仕事に携われて、誇りと思っている」とお話してくださり、経営者の理念がしっかり従業員に引き継がれているのです。

子どもが「遊ぶ」事をもっとも大切に考えているドイツの施設を視察する機会を与えていただき、その中でもっとも考えさせられたのが「おもちゃ」の果たす役割でした。何処も子どもの遊びのための環境作りが見事に行われていて、室内には「積木遊び」「ままごと遊び」「絵本・ゲーム遊び」「絵を描く、粘土、工作などの遊び」などコーナーが作られていて、それぞれの遊びに必要な道具（おもちゃ）が十分に揃えられているのです。おもちゃの質、量ともに日本の施設とは比べようないほどです。そのほとんどが木を素材としたもので、遊び方の多様性、デザイン共に素晴らしいものがたくさんありました。最近では日本でも、こういった環境を大切にしている施設が増えてきています。



地元前橋ではスズラン百貨店を残し、前橋西武が 2004 年撤退、2006 年 WALK 前橋撤退を受けて、市と会議所・街中関係者の TMO 委員に選出されました。「子どもの遊び場」の提案を強く訴え、2007 年 12 月に全国でも初めて行政がかかわった子育て支援室として注目を浴びた、「前橋プラザ元気 21 プレイルーム・親子ルーム」の開設に深く携わりました。特に安全性の高いヨーロッパの輸入木製玩具(主にドイツ製)を多くとり入れ、現在でも全国から行政の見学者が絶えません。渋川市・沼田市・安中市など、県内の子育て支援室のプロデュースやおもちゃの研修・特別支援学校の教材教具の講師や最近では療育施設からの依頼などが多くなりました。2006 年には「群馬におけるドイツ」ということで、ドイツ大使館を初代会長平形様や会員の皆様と訪問し、2007 年には草津の全国日独協会連合会レセプションに参加し、大使に花束を贈呈する貴重な機会も頂きました。



ドイツのおもちゃを扱い、本当に沢山の皆さんにお世話になり、日本の子ども達に手渡していけることに感謝申し上げます。これからも、よろしく願いいたします。

2022年5月 富岡にて

見澤 ゆかり

この記事を書くにあたり、写真を探していたところ、自分のドイツ留学が2017年に終わっている、つまり既に完全帰国して5年が経過しようとしていることに気づいて、どこぞのJ-Popの曲ではないが震えた。多くの先達からすれば、私はまだ若輩者で、このようなことを書くとお叱りをいただくかもしれないが、ドイツにいたおよそ4年間は人生でもっとも幸福な時期だったと思う。もちろん、完全帰国することに悔いはないが、音楽で生きていくなら、正直ヨーロッパにいる方が社会保障も手厚く感じる今日このごろである。

今回の記事はそんなコロナ禍における芸術家への公的支援という面について書きたいと思う。他のEU諸国のことは残念ながら不勉強のためわからないが、ドイツにおいては音楽家への支援がある程度はされているという印象である。日本でもコロナ初年度においては、事業者に対して補助金というものがあったが、ドイツにおいては、損益関係なく音楽家や舞台芸術など活動が止まってしまったジャンルの芸術家に対して年間日本円にして100万円の生活費補助が出たと聞く。そもそも、音楽家は保険料が他の職種より安くなるなど公的支援が充実していたが、コロナ禍になり、ドイツと日本の差が如実に現れたと思っている。

しかし、現状に陰で不満を言っているだけでは物事は解決しない。今まで日本の芸術への支援が他の先進国に比べると少ないのには、支援する側、つまり政府などの問題もあるが、我々支援を受ける側にも問題はある。日本の教育は批判的精神を養うプログラムが少ないという統計があるように、全体的に日本人は”批判”というものがうまくできない傾向にあると感じる。これは芸術家も同じで我々もまた政府や企業に対して芸術活動への支援の重要性を説いていく必要があるのではないだろうか。

記念誌に寄せる文章としてはやや暗い内容かもしれないが、批判的精神こそドイツ的精神であると考え、今回の60号記念への寄稿としたい。

2022年5月 富岡にて 見澤ゆかり



2017年 ベルリンにて 担当教授のマーク・アンドレと

私の生き立ちとぐんま日独協会との係り

島田 卓爾

【私の生き立ち】 昭 8.3、渋川市（旧子持村）に郵便局を営む農家の熊七、とみの三男に生まれ、地元の小学校から県立渋川中学校（旧）高等学校（新）を経て、学習院大學（政治学科）を卒業、国鉄運輸調査局に勤務したが大喀血で肺結核が判明、2年間闘病生活（群大病院）結核新薬のお蔭で完治。

その年に受けた陸上自衛隊幹部候補生学校に合格し、幹部自衛官の生活始まる。（昭 33）部隊での中隊長、師団司令部での副官、総監部での広報法務幕僚、三島由紀夫割腹自殺に遭遇、退官（昭 46. 3 等陸佐）。

自衛隊創立記念式典3度にわたり総合司会経験退官後、郷里の旭石材工業（株）常務取締役5年を経て推されて子持村議会議員、引き続き村長当選4期16年間郡町村会長、県副会長を歴任、この間、天皇陛下ご夫妻の行幸啓を賜わり子持村役場内で会食の機会をいただく（平 10）旭日小綬章を宮中で拝受、

その後の人生に空きはなく、設立間もない時期に「ぐんま日独協会」入会へのお誘いを受けて、大いなる希望をもって、会員の一員とさせていただいた。現在も会員であり、群馬県護国神社総代会会長も経験し、社会福祉法人子持山学園（児童養護施設）理事長として、多くの方々のご援助をいただき乍ら「いと小さきものへの愛を」ささげるとともに老人介護の春日園の評議員も勤めさせていただいております。

【ぐんま日独協会との係り】・駅頭にカーキ色の色彩服につつまれた恰幅の良い男性2人が、何やら話し込んでいるところ通り会わせた私は問うた「ゾルダート？ オーダー ポリツァイ？」 せい一杯のドイツ語が通じ、警備のためその駅（確かフランクフルト駅）に駐在する兵士たちだと分かった。ドイツでは平時でも駅頭の守備に兵士を派遣・駐在させている。吾が国はどうだろうか。国防に任ずる自衛官（=兵士）は国民の分からぬ陰で働かされている実情に、如何に国の防衛の実態に差異のあることに腐心を感じた。

かつて日独は同盟を結び、同じ目的であえて戦に挑んだ。結果は如何にあれその残渣がどこかにあるだろう、それを探してみようと十何年前ブラウンシュバイクで行われた日独協会総会のツアーに参加した。それはなかったが、得ること大きにあった。先づドイツに関心を寄せる気持が高揚するだけでなく歌唱で言えば、シューベルトのヴィンターライゼはじめ幾つかの独唱曲をしばしば歌うようになり、葬儀の折にはベートーベンの熱情をぜひ流して欲しいと望むようになる。大学の第二外語選択ドイツ語の柳谷教授、ロベルト・シンチンゲル教授に語学の妙味を教授された恩恵があるからかも知れない。



わたしのドイツ

赤羽 良一

みなさん、こんにちは。会員の赤羽良一です。4年ほど前に入会し、ドイツサロンには、確か、5回くらい出席しましたが、これもコロナ禍で対面ではなくなって、そのままオンラインの会にも出ずに今に至っています。私は高崎市に生まれ、その後27歳から2年半ほどアメリカで研究生活を送って、帰国後は国立学校の職員を34年ほど勤めて、5年前に退職しました。

私とドイツとの出会いは、まず、父の会社の上司の方から相良・木村のドイツ語の辞書を大学の入学祝いいただいたことです。これは、私の人生で、もっと大切な思い出の一つになっています。この辞書は、学生時代はもちろん使っていましたが、現在は別の辞書を購入して、あまり使わないようにし、本棚に置いてあります。本来であれば、ボロボロになるまで使わなくてはいけないのに、贈ってくださった方も笑っておられることでしょうか。もう一つの出会いは、やはり、大学でドイツ語を学んだことです。私は昭和45年に大学(工学部)に入りましたが、当時、ドイツ語は必修で、1年次は講読と文法を週各1コマ、授業は2年次まであって、4学期分、計8単位、専門科目で化学ドイツ語(1単位)もあったので、合計9単位、なんとか単位を修得しました。

1年生では金井孝純教授、2年生の時には多くの訳書のある川崎芳隆教授の授業を受けました。川崎先生が授業で、ゲーテの「修業時代」に出てくる「君知るや南の国。レモンの花咲き、」(山崎章甫訳)で始まる有名な詩をサラサラと黒板に書いて、意味や文体を説明してくれたその光景は、今でもよく覚えています。あの頃は、ゲーテやヘッセ、ツヴァイクなどの詩や小説を電車の中や、部屋に寝転がって読んだりしていましたが、ゲーテの「羅馬悲歌」(竹山道雄訳)にも本当に感動(あるいは感激か)しました。本といえば、学生時代、お金に困り、本棚2つ分くらいを売る羽目になりましたが、当時人文書院から出ていたゲーテ全集の持っていた分8巻と、何冊かあった片山敏彦著作集の「ドイツ詩集」だけは売らなかったことも、今思えば、背に腹はかえられないことへの、私のささやかな抵抗であったのかも知れません。

給料をもらうようになってからは、ときにドイツ音楽を聞く程度で、ドイツ文学にもすっかりご無沙汰してしまい、また、私の分野(化学)でもドイツ語の学術雑誌もなくなっていき、何十年もドイツやドイツ語に触れる機会もあまりなく過ごしてきましたが、遅まきながら、60歳近くになって、学会でエストニアに出かけ、そのおり、ついにフランクフルト(マイン河畔)に二泊三日で滞在する機会に恵まれました。ご存じかも知れませんが、実は、エストニアもドイツには大いに関係のある国です。19世紀まではいわゆるバルトドイツ人が多く住んでおりましたから、大学もドイツの影響を大きく受けました。学会が開催されたタルトゥ大学は、国際的な大学ですが、歴史的には特に医学部が有名で、精神医学の開拓者であるエミール・クレペリンが19世紀末に教授を務めました。人文学も盛んであるらしく、記号論のユーリー・ロトマン率いるタルトゥ・モスクワ学派の本拠地でもありました。学会中、今は博物館になっている解剖学教室(Old Anatomical Theater)を見学、大学の創立当時(1632年)の資料などもたくさん集めてきたので、いつか、「エストニアから見たドイツの大学」というようなタイトルで文章にしてみたいと思っています。

このようなわけで、ドイツとの直接の関わりはあまりないのですが、大学でドイツ語が必修であったおかげで、ドイツへの興味を今でも何とか持ち続けております。これからは自由の身、会員のみなさんに教わりながら、ドイツに触れる機会を増やしていきたいと思っています。私はお菓子も好きですが、協会の集まりでは、会員のみなさんと、ぜひビールやワインを飲みながらお話できたらうれしいです。それでは、これからもどうかよろしく願いいたします。

～ベルリンの夜は更けて～ 宵の街に静かに指笛の音は流れる ♪

長井 宏之

★ ドレスデンにエルベ川の船下り観光に出かけた。船着場の手前にトンネルのような地下道があり、その中ほどに大道芸人のアコーディオン奏者がいた。独特のリード音の郷愁を帯びた音色がトンネル内に心地良く響いている。私は初の欧州旅行でかかる芸人も珍しく、アコーディオンの音楽に聞き入った。

ふと思いついて自分の指笛 Die Fingerpfeife/Fingerflöte を試してみた。すると、これが何とも快適に、実に素晴らしく、哀愁を帯びてトンネル内を満たした。かの芸人が和音伴奏を付けてくれた。トンネル内のエコー効果は著効を示し私を“プロ演奏家”にした。私はすっかり嬉しくなってしまった。

続いてエルベ川の名物観光船に。同行の知人が私に甲板上で指笛を吹け、という。そそのかされて演奏してみた。いつのまにか周りに 20 人ほどの観光客らが集まって聴いている。見れば友人は帽子を持って客らの間を回り、チップを乞うているのではないか。客らも気前よくコインを出している。こうして私は自分の指笛で初めて収入を得た。(尤も、稼ぎは全て友人の懐に。私には 1 ペニヒも来なかった。)

★ 以後時折、観光地の街角で芸人を見かけると、まず演奏を聴きチップを出す。次いで追加のチップを出して勝手に傍らで指笛を 1 曲だけ演奏させていただくことにしている。勿論、私への投げ銭は無いのであるが、万一あっても受け取れない。欧州でも、大道芸人をするには事前に市役所に行って詳細な計画・予定日時、場所、方法などを申請して許可を得ておかねばならないからである。指笛はどの地でも珍しいとみえ、大勢の通行人が立ち止まって聴いていてくれる。2008 年、蘭国ロッテルダムでは 1800 人を前に舞台上で指笛を独奏した。彼の地のプロ演奏家がビデオに撮影させてくれ、と頼みに来た。(Jomart & Natasha 他)



★ 憧れのアルト・ハイデルベルク、小説にかぶれて、ついにその現物にきた。すかさず城を背景にして指笛を演奏(しているフリ、エア)で記念写真を撮る(名所見学の折には必ず指笛姿も撮影する習慣で)。

★ ライン川の観光遊覧船で川を下る。やがて右手に大きな崖があり、見上げるその上には妖しい魔女がいるという。船上のスピーカーから観光用にローレライの名曲が流されてきた。中世人の気分になって暫し、ひたぶるに物悲しく Ich weiß nicht, was soll es bedeuten, / Daß ich so traurig bin... 想いに耽りつつ、指笛のポーズで写真を撮る。公共の場は演奏不可。エンジンの大音に紛らわせ 2,3 音だけそっと吹鳴して後はココロの中で演奏した。

【参考写真：プラハ・カレル橋の“猿”のある名物屋台/独フェスティバル・県庁】

♪ ベルリンでは、短期の旅行者など所詮は異邦人。黄昏に独りホテルから出てみれば、ベルリンの街の灯り、車の尾灯、様々な紅い灯・青い灯で、そぞろ郷愁が身にしむ月下のエトランゼ。やがて街は夜も更けてそっと指笛を吹いてみれば、流れ去る灯りの故か優しい音色が一層ココロに沁むのだった。自分だけの「ベルリンの夜は更けて」に、初めての欧亜大陸への旅行は殊に、一段と深く思えた。 ああ『ベルリン』、不思議な感傷!



♪ 指笛は奇跡の“楽器”、人間の身体だけの音。金属も木も使わずまた唄声・吟声でもない。神秘の音。本質的にヒトの魂との交流が起こって、吹く人、聞く人に共振するという、何とも不思議な得も言われぬ魅力がある。しかも指笛は、いつでもどこでも即座に演奏できるから真に好都合である。自己の生命の根源を癒し、大自然との一体感を得、宇宙調和を観想する。Mysteriös und Wunderbar! これを習得できたのはまさに我が人生に宝玉を得たるにも等しく、日々神佛に感謝する次第である。(☆伯林千九百九十九年七の月に世界は滅びる、との流言・弄句・下郎言を踏み越えての初訪独であった。)

近頃考えること

笠原 浩一郎

相変わらず米寿を超えた今でも診療を続けているわが身をなんと表現してよいのやら。“生涯現役”などと気負ったり誇ったりする思いは微塵もなく、唯々、時に流されて過ごしてきたように感じております。例外として、僅かに自己主張したのは東北大学理学部受験とドイツ留学だったでしょうか。

現在まで、所属していた医師会は群馬郡医師会、勢多郡医師会、桐生市医師会、前橋市医師会、太田市医師会と5指を数え、まだこの先不明ですが、明らかに奇妙な珍しい記録なのです。それは診療というものが、勤務医にしろ、開業医にしても、腰を落ち着けて、出来得れば一生一か所に根を張って地域医療に尽くすのを常識とされているからです。いつもこの点を話題にしますと当然ながら、医師仲間からは侮蔑を込めて、信じられないといった驚きをもって迎えられる。

今は太田市にある介護老人保健施設（以下老健、知る人が少ないのが残念ですが、医師の常勤が義務づけられている）に週4日通っております。勿論、送迎してもらっておりますが、片道約一時間は私にとって貴重過ぎますし、最初は躊躇していたものの、途中の上武道路から見る赤城山の景色の素晴らしさに虜になってしまい、もう三年も太田通いを続けております。それは帰途、富田跨道橋から今井跨道橋にかけて眺められる赤城の左稜線の美しさです。標高2000m以下の山々で赤城ほど長く、障害物のない稜線は他にはないのでは？（前橋の上毛大橋から眺める赤城の右稜線は、関東平野へ流れるように下る趣の美しさがあります）

古いM老健は4人の大部屋と2人部屋で構成されており、職員は皆ベテラン揃いで、利用者は「あと2年だ」とか「あと5年は頑張らなけりゃ」とか口々に百歳になるのを楽しみにしている方が沢山おられます。総じて言えば、こころとからだの働きがかみ合わず、同調しなくなったために起こる事ばかりです。こころの要請にからだがついてゆけない、からだの悲鳴をこころは知らんぷり、悲喜こもごもの毎日です。認知症は程度の差こそあれ全員に認められており、先日、重度の見当識障害のある女性が長年連れ添った夫を誰だか判らなくなっていて「あの方は立派なひとで奥さんもいる方ですから、私はお世話になれません」と周囲を唾然とさせた事件がありました。

ご存じないかもしれませんが、認知症がかなり進行していても、その感情は保たれているものです。85歳の女性が若いハンサムな理学療法士に嬉々としてリハビリを受けていたり、気難しい92歳の男性がやさしい女性介護士の話を素直に頷いていたり、日々のセンターホールの風景です。

そして、皆さん安定、不安定様々ですが、複数の病気を抱えておられます。発熱、意識消失、誤嚥、転倒骨折、褥瘡、静脈血栓症などよくある出来事で、命に直結する病気の発生も稀ではありません。看取りの段階（緩和ケア）の方も常時複数おられますし、平均月一回は死亡例もあります。夜間いかなる時間でも枕辺に駆け付けるのが我々の宿命であり、死亡診断書を書く前に、ご家族と生前の思い出など語り合います。老衰を含めてすべての”死”は医療者にとって敗北ではありませんが、悔しさ、申し訳なさ、そして反省せねばならない事項は必ずあります。

ここで必然的に我々は色々な死生観を知っておかなければならないと考えております。仏教では生死はセットになっており、問題にもしておりませんが、浄土宗だけは六道輪廻から念仏により極楽浄土に生まれ変わることを約束してくれております。更に日本古来の死生観の特徴は冥界、霊界の存在です。これにより我々は故人の霊魂と何時でも交流できるわけです。また、忘れるわけにいかないのは、生物進化論の進歩により新たな死生観が展開されていることです。遺伝子（正確にはRNAですが）が変異をして、変り続ける限り地球環境に適応して生き残る、選択されたもの以外は死滅しなければならないと云う必然説です。これは人類だけでなく全生物に適用される説ですが、私個人にも当てはめなければならないでしょう。“死”をめぐり色々な想念が浮かびますが、お読みいただいた方に問題を投げかけたく思います。

第二の故郷 “ドイツ”

對馬 良一

私が西ドイツで生活したのは、二十二歳から二十五歳までの独身時代で石炭産業が花形産業であった昭和三十三年からの三年間である。ヨーロッパ最大の工業地帯である西ドイツのウエストファーレン州のルール地方でルッセルドルフの近郊のゲルゼンキルヘンという人口三十八万人の街である。当時は海外旅行など自由に出来ない時期だったので西ドイツでの炭鉱技術習得という日本政府と西ドイツ政府協定に全国の炭鉱各社から若い技術者の卵が抜擢されたが、中には東大出身の人もいた。技術習得の他に戦争で少なくなった労働力を補う意味もあったようである。とにかく三年間、体の大きなドイツ人にまじり働きそして学び生活して来た。

親友になったドイツ人の家庭で一年半生活しドイツ人家庭や子供の躰など生活様式を身をもって体験した。はじめてドイツ人の家庭に招待され、赤いバラの花を持って行って失笑され、日本人というのでライスの御馳走を作ったのでと、ミルクで炊いたライスを出され、味をきかれ美味しいと答えたため、次回に訪問した時に同じものを出され食べられず叱られたにがい思い出もある。赤いバラは相手に愛情を表わすものであり、また白い花はお悔やみの意味であり、花の本数はかならず奇数でなければならない事も、美味しいものは美味しい、まずいものはまずい、とはっきり言う事も知った。ドイツ人はよくビールを飲む。体質的に日本人よりアルコール分解酵素が多いときいた。そのせいかあまり酔って道路に寝ているようなことは見た事はない。

一度ビヤホールで、酔って他人に迷惑をかけた人のネクタイをチョン切りみせしめのため店に吊るすのを見た事がある。ドイツの公衆トイレは清潔である。日本では用を足している人のうしろに列をつかって並ぶが、ドイツではトイレの入口に並ぶ。並んだ順番にトイレに入るのであとの人が先になる事はない。

言葉もあまり判らないときに挑戦して取得した自動車運転免許と炭鉱技術の国家試験、若い時の頑張りとは何も恐れない行動力は、今では過去の思い出である。休暇を利用して旅行したヨーロッパ各地。そしてドイツの各地、十年前に家内と共に第二の郷里西ドイツに、青春のエネルギーをぶっつけて頑張ったなつかしい炭鉱の姿、美しく成人した下宿先の娘、ドイツの思い出はつきない。

いろいろ教えてくれたスエズの西、ヨーロッパというオッカサンのようなそしてデッカイ先生と第二の故郷ドイツに限りない愛情と名残を残して帰国し早や三十年、群馬の地で再びドイツの事を勉強できるうれしさ、テレビや雑誌にドイツの街並みが出ると声が出る程懐かしく思い出される昨今である。

(館林)

【お断り】

現在「ぐんま日独協会」の副会長であり、協会設立時からの会員でもある對馬良一さんのハイマート60号用の原稿は、ご本人が只今執筆困難なため今回は遠慮したい旨、對馬さんの奥様からお申し出がありました。ご承知おき下さい。

これにより、かつて *Heimat* 創刊号 (1981年3月1日) に掲載された對馬さんが執筆された記事を、今回の原稿提出に替えて掲載しました。

※元記事は縦書きでしたがそれを横書きに改めたのみで他は変更してありません。

【ぐんま日独協会】

ぐんま日独協会の概要 ……相互学習・相互啓発の場に……

ぐんま日独協会は、ドイツ好き集まれの会です。ドイツ語を話したい、留学していたことがある、ドイツを旅行したい等、ドイツが好きでドイツに関心がある方であれば、どなたでも参加・入会が可能です。また特別の資格・学歴・紹介などは必要ありません。

日本人もドイツ人も国民性は勤勉で真面目、お互いに素晴らしい長所を持っています。ぐんま日独協会は、その長所・持ち味を吸収しあい、自己を高めることに役立てれば、とのコンセンサスを基に運営しています。

ぐんま日独協会は、群馬県庁県民ホールにおいて隔年で「ドイツフェスティバル in ぐんま」、また毎月1回ドイツ人も参加する「ドイツサロン」を開催するなど、ドイツについて多面的に学んでいます。是非これらの活動にご参加ください。ぐんま日独協会は、全国日独協会連合会に加盟するとともに、在日ドイツ連邦共和国大使館とも緊密に交流・連絡を取り合っています。

最新の行事・活動計画、過去のパネル展の内容、ぐんま日独協会会報「ハイマート」等も当ホームページでご覧いただけます。

ぐんま日独協会 会長 鈴木 克彬

沿革

2022.05 Dr.クレメンス・フォン・ゲツェ駐日ドイツ連邦共和国大使群馬県訪問

2020.05 オンライン活動初の試み、「ドイツ語ニュースを聞く会」で

2020.04 COVID-19 拡散防止から総会中止し議案の書面評決実施

2019.06 第8回「ドイツフェスティバル in ぐんま」(県庁県民ホール)

2018.11 創立30周年記念式典、記念コンサート実施

(昌賢学園まえばしホール【前橋市市民文化センター】)

2018.03 第1回「ドイツ映画を見る会」開催

2018.02 第1回「ドイツ語ニュースを聞く会」開催

2017.11 ハンス・カーフォン・ヴェアテルン駐日ドイツ連邦共和国大使講演会(県庁ビジターセンター)

2017.06 第7回「ドイツフェスティバル in ぐんま」開催

2016.07 第1回高崎経済大学ドイツ人交換留学生交流会

2015.08 ドイツ人少女フルートカルテット“FluTeens”演奏会

2015.06 第6回「ドイツフェスティバル in ぐんま」(県庁県民ホール)

2013.05 第5回「ドイツフェスティバル in ぐんま」(県庁県民ホール)

2012.11 ドイツ大使館訪問

2012.01 日独交流150周年記念：ベルツ博士(1月21日)関連講演会

2011.12 日独交流150周年記念：ブルーノ・タウト関連講演会

2011.09 第4回「ドイツフェスティバル in ぐんま」(日独交流150周年記念)

2011.05 日独交流150周年記念：ぐんま日独協会員10名ドイツ各地訪問

2011.04 日独交流150周年記念：全国日独協会連合会27名来県

2010.03 ザールブリュッケン日独協会17名来県し、当会と友好関係締結

2009.07 第3回「ドイツフェスティバル in ぐんま」開催

2008.06 毎月第一土曜日 高崎市にドイツサロン開設

2008.05 平形名誉会長（当時・故人） ドイツ共和国連邦功労勲章一等功労十字章受賞

2008.04 総会にて、平形義人名誉会長、鈴木克彬会長就任

2007.07 第2回「ドイツフェスティバル in ぐんま」開催（県庁県民ホール）

2007.04 全国日独協会連合会総会を草津にて開催（『日本におけるドイツ』）

2005.07 第1回「ドイツフェスティバル in ぐんま」開催（『日本におけるドイツ』）

1989.03 会報を創刊（第4号より名称を「ハイマート」とした）

1988.04.17 設立総会及び記念パーティ開催（前橋商工会議所会館）

H. J. ハリヤー駐日ドイツ連邦共和国大使・清水一郎群馬県知事ご臨席のもと盛大に開催

1987年 故平形義人（会長）、佐藤進一（顧問）、故中沢隼三（元副会長）、故角田勤（元副会長）等が
発起人代表として準備会発足

【ぐんま日独協会 会則】

第1条 名称

本会は、ぐんま日独協会と称する。

第2条 目的

本会は、各種の日独交流・研鑽を通して、日独友好親善を図ることを目的とする。

第3条 事業

本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 1 日独友好親善のための集会等の諸事業
- 2 ドイツ文化紹介のための講演会、研究会等
- 3 群馬県に因む日独交流の認識を深めるための研究活動
- 4 その他、前条の目的を遂行するために必要な事業

第4条 会員

会員は、本会の目的に賛同する個人及び法人とする。

第5条 事務局

事務局は会長宅におく。

第6条 役員

本会は、次の役員をおく。但し、会長は必要に応じ他の役員をおく事ができる。

- 1 会長 1名
- 2 副会長 若干名
- 3 執行理事 若干名
- 4 理事 若干名
- 5 事務局長 1名
- 6 監事 2名

第7条 名誉会長、名誉理事、顧問、参与

本会には、前条の役員のほか名誉会長、名誉理事、顧問、参与をおくことができる。

第8条 役員を選出と任期

役員は、会長・副会長・執行理事・理事で構成する理事会で選出し総会で承認する。任期は2年とする。但し再任は妨げない。

役員に欠員が生じた場合は、理事会で選出し、その任期は、前任者の残任期間とする。

第9条 役員の仕事

- 1 会長は本会の業務を総理し、本会を代表する。
- 2 副会長は、会長を補佐し、会長事故ある時は、その業務を代理する。

- 3 執行理事は、担当業務を受け持ち処理する。
- 4 理事は、本会の業務全般についての意見を述べる。
- 5 事務局は執行理事で構成し、事務局長は会長の命を受け、事務を処理する。
- 6 会計は、該当する執行理事が受け持ち会計事務を行う。
- 7 監事は、会計を監査する。

第10条 総会及び役員会

- 1 本会の総会は、会員をもって構成し、毎年1回、会長が召集し、会長は、議長を指名する。
- 2 総会は、本会の事業計画、役員を選出その他重要事項について審議し、決定する。審議の決定は、出席者の過半数とする。
- 3 必要に応じ、執行理事会を開催することが出来る。
執行理事会は会長が招集する。

第11条 運営費

本会の運営に必要な経費は、会費及び寄付金をもってあてる。

第12条 会費

会員は、本会を維持するため、年度初めに会費を納める。
会費は、年額、個人会費3,000円 家族会費500円、
学生会員1,000円、法人会費10,000円とする。

第13条 会計年度

本会の会計年度は、4月1日～翌年の3月31日とする。

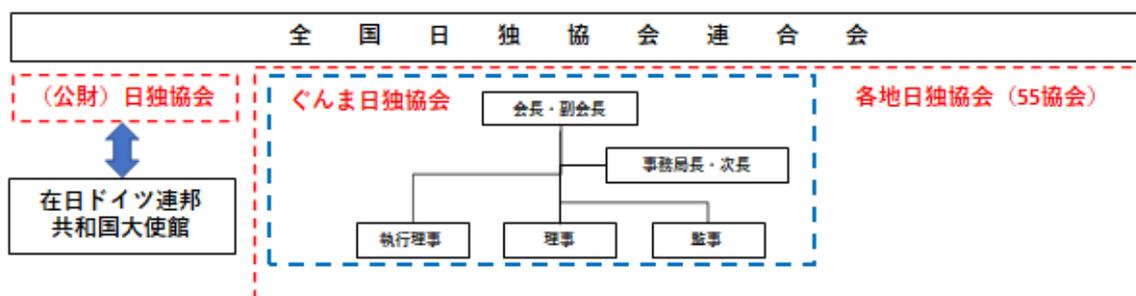
第14条 会則の変更

本会の会則の変更は、総会の議を経て変更することが出来る。

付 則

- 1 本会則は、平成13年1月1日より施行する。
- 2 本会則は、平成22年4月17日一部の変更。
- 3 本会則は、平成24年4月28日一部改定。
- 4 本会則は、令和2年4月29日一部改定。
- 5 本会則は、令和3年4月29日一部改定。
- 6 本会則は、令和4年4月29日一部改定。

ぐんま日独協会の位置付けと組織



ぐんま日独協会 2022～2023 年度役員 (2022 年 4 月改定)

| | | | | | |
|---------|--------------|----------|-------|--------|-------------|
| 会 長 | 鈴木克彬 | | | | |
| 副 会 長 | 對馬良一 | 島田卓爾 | 田口久美子 | 中澤敬 | |
| 事 務 局 長 | 平方秋夫 | | | | |
| 事務局 次長 | 井上晃良 | 杉本隆雄 | | | |
| 執 行 理 事 | (◎印は各担当リーダー) | | | | |
| 企画担当 | ◎瓜生郷子 | 杉本隆雄 (兼) | 原鏡 | | |
| 渉外担当 | ◎井上晃良 (兼) | 大熊富吉 | | | |
| 経理担当 | ◎平方秋夫 (兼) | 鈴木和子 | | | |
| 広報担当 | ◎宮越リカ | 岡博子 | 長井宏之 | (日向泰史) | |
| 理 事 | 橋爪洋介 | 中島資浩 | 広瀬正史 | 角田登 | 川田正彦 |
| | 富所敏浩 | 末永秀雄 | 曾我隆一 | 熊川栄 | 澤田まゆみ |
| | 富所民江 | 末永マサ子 | 渋川ミドリ | 堀口靖之 | 金井康夫 |
| | 白倉卓夫 | 三井聡 | 川田正江 | 立川統子 | 高野誠 |
| | 高野広美 | 白倉由美子 | 鈴木喜代 | 黒田桂子 | 長谷川早苗 |
| | 鈴木剛一郎 | 吉田博文 | | | |
| 監 事 | 笠原浩一郎 | 加藤幸輝 | | | |
| そ の 他 : | 通訳チーム | ◎井上晃良 | 長谷川早苗 | 宮越リカ | |
| | Zoom ホストチーム | ◎平方秋夫 | 瓜生郷子 | | |
| | 共愛プロジェクト | ◎岡博子 | 瓜生郷子 | 宮越リカ | 平方秋夫 (日向泰史) |
| | () は休会中 | | | | |

ぐんま日独協会 2020～21 年度役員

| | |
|---------------|--|
| 会 長 | 鈴木克彬 |
| 副 会 長 | 對馬良一 島田卓爾 田口久美子 中澤 敬 |
| 事 務 局 長 | 近藤基晴 (兼) 平方秋夫 (兼) 杉本隆雄 (兼) 井上晃良 (兼) |
| 企 画 担 当 | 【正】 近藤基晴 【副】: 杉本隆雄 宮原喜利雄 瓜生郷子 |
| 経 理 ・ 渉 外 担 当 | 【正】 平方秋夫 【副】: 井上晃良 鈴木和子 大熊富吉 長井宏之 |
| 広 報 担 当 | 【正】 遠藤 功 【副】: 岡 博子 宮越リカ |
| 青 年 部 担 当 | 【正】 日向泰史 |
| 理 事 (順不同) | 橋爪洋介 中島資浩 広瀬正史 角田登 川田正彦 川田正江 富所敏浩 富所民江 川島孝一 末永秀雄 末永マサ子 曾我隆一 熊川栄 澤田まゆみ 渋川ミドリ 堀口靖之 金井康夫 白倉卓夫 白倉由美子 三井聡 立川統子 高野誠 高野広美 原鏡 鈴木喜代 長谷川早苗 鈴木剛一郎 吉田博文 黒田桂子 笠原浩一郎 加藤幸輝 |

【活動の様子】



クマさん作り活動



会員の手作り作品



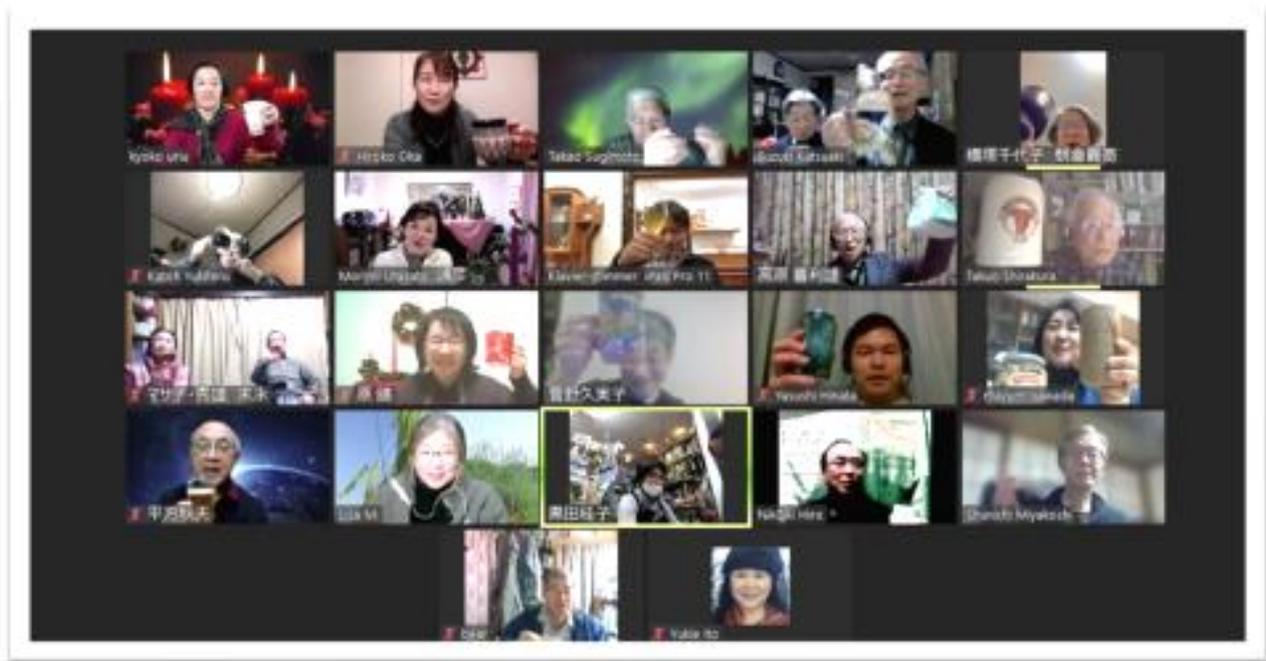
ドイツフェスティバル in ぐんま 2019 多数の出店



ドイツ語教室 前橋会場 (休止中)
高崎会場はリモートに移行



陶豆屋(会員の店)会場での月例のドイツサロン
(コロナ禍で休止、リモートで毎月実施中)



オンライン懇親会／Zoom 使用

～ぐんま日独協会創立 30 周年記念コンサート～

ドイツ音楽紀行

(第一部)
 小田原 由美 [ヴァイオリン&ヴィオラ]
 小田原 瑞輝 [ホルン]
 田中 修一郎 [ピアノ]

J.S. バッハ/アリアーソ (ヴァイオリン&ピアノ)
 クロネン/ラフマニョフ (ホルン独奏)
 R. シュト라우スの/アンダンテ (ホルン&ピアノ)
 ベートーヴェン/ロマンティック (ヴァイオリン&ピアノ)
 プラムス/インテルメッツォ (ピアノ独奏)
 プラムス/ホルントリオ第1楽章 (ヴァイオリン&ホルン&ピアノ)

(第二部)
 渋谷ナタリ [ピアノ]
 澤田まゆみ [ピアノ]
 ～二台ピアノ&連弾～

モーツァルト/歌劇「魔笛」序曲 より
 J.S. バッハ/主よ、人の望みの喜びよ
 フーグアーン楽劇「ワルキューレ」より
 R. シュト라우スの/歌劇「ばらの騎士」より ワルツ
 プラムス/ハンガリー舞曲第1楽章
 プラムス/ハイデルンの主題による変奏曲 より
 日本民謡 / 川本美

2018
11/11
 (日)

昌賢学園まえばしホール(前橋市民文化会館) 小ホール
 13時30分 開演(13時 開場)
 一般 2,500円 大学生以下 1,000円 **全席自由**

主催 / ぐんま日独協会 共催 / 前橋市、(公財)前橋市まちづくり公社
 後援 / ドイツ連邦共和国大使館、全国日独協会連合会、群馬県、上毛新聞社、群馬テレビ



講演会

ヴェアテルン駐日ドイツ連邦共和国大使

創立 30 周年記念コンサート
演奏者はすべて本協会員

入場無料

2017 6/30(金)~7/2(日)
群馬県庁 1階 県民ホール

第7回 ドイツフェスティバル in ぐんま
～学ぼう 食べよう 遊ぼう ドイツ!!～

16/30(金) 18:00～18:00
7/1(土) 10:00～17:00
7/2(日) 10:00～18:00
開催時間があるので
ご注意ください

**パネルコーナー
パネル展示**
ベルツ博士とぐんま ～ドイツの温泉・群馬の温泉～
日本とドイツの交流の架け橋となったベルツ博士と
群馬の温泉のことを知しましょう！

ドイツメルクリン製ブリキ玩具
独産品多数展示！

ドイツ輸入食品 (群馬県産もあり)
パン、ソーセージ各種
ワイン、ビール各種
ロンネフェルト紅茶

ドイツ輸入製品
ドイツ製玩具
ドイツ製アクセサリー
ドイツ製時計

**ドイツ製品紹介・販売コーナー
ドイツ輸入品の紹介・販売**
詳細は要覧参照

**テディベアコーナー
テディベアの展示・クマさん作り**

テディベアの展示
ドイツ製シュタイフベア、手作りクマさん、
テディベアイラスト、みんなのぬりえ、
ワイヤーベア

クマさん作り
手作りクマにチャレンジ
ベアぬりえも楽しみましょう

ドイツと日本
Zukunft gestalten
ともに未来へ

主催 ぐんま日独協会

入場無料

第8回 ドイツフェスティバル in ぐんま
～知ろう、楽しもうドイツの文化～

2019 6/28(金)~30(日)
群馬県庁 1階 県民ホール・県民広場

6/28(金) 10:00～18:00
6/29(土) 10:00～17:00
6/30(日) 10:00～16:00
開催時間
異なるので
ご注意ください

**パネルコーナー
パネル展示**
「ドイツに渡った日本文化」
現代のマンガ・アニメ・食文化から
伝統的な日本文化まで、
広くドイツの現状を紹介します

**音楽コーナー
ドイツのフォークダンスとコーラス**

フォークダンス (29日・30日のみ)
出演：前橋市フォークダンス協会

コーラス (29日・30日のみ)
出演：コール・詩音

**ドイツ製品紹介・販売コーナー
ドイツ輸入品の紹介・販売**
詳細は要覧参照

ドイツ輸入食品 (群馬県産もあり)
パン、ソーセージ各種
ワイン、ビール、ジュース各種
ロンネフェルト紅茶

ドイツ輸入製品
ドイツ製玩具
ドイツ製アクセサリー
ドイツ製時計
独産外科靴 (足型測定)

**テディベアコーナー
テディベアの展示・クマさん作り**

テディベアの展示
ドイツ製シュタイフベア、手作りクマさん、
クマベアイラスト、みんなのぬりえ、ワイヤーベア

クマさん作り
手作りクマにチャレンジ
ベアぬりえも楽しみましょう

ベア & 赤ずきんちゃん写真撮影
ベアや赤ずきんちゃんになって
写真を撮りましょう

ドイツと日本
Zukunft gestalten
ともに未来へ

主催 ぐんま日独協会

ドイツフェスティバル in ぐんま

胸像はベルツ博士。人形の写真は会員の作品「クマさん作り」活動の成果によるテディベア

ドイツフェスティバルでのさまざまな音楽活動



本場のドイツの味をどうぞ！ **マイスターの技術をドイツから直輸入**

●ドイツソーセージ

**ミュンヘナー
グライスヴルスト**
ミュンヘンの白い
ソーセージ。ネウツ
としてジューシーな
美味しさです。

**レーゲンス
ブルガー**
歯ごたえのあるケー
シングで、力強い味
のソーセージです。

**プラートヴルスト
シュネッケ**
話題の「酒好きソー
セージ」です。グリ
ルがおすすめです。

**IQF プフート
ヴルスト**
ニュルンベルク特産
物のソーセージ。食
感をそそぐ。独特の
ハーブとスパイスの
香りが特長です。

●ドイツパン

ミニ シリアルロール
シリアルがたっぷり
と配合された
食事パンです。

パーティー プレッツェル
大人気のプレッツェルが可愛い
ミニサイズになりました。

サンドイッチチャバタ
石窯で焼かれ外側はクルスビー、
内側はモチモチでサンドイッチに
最適です。

ドイツから直輸入のソーセージ、パンを販売



フェスティバルの要員
民族衣装で集合

フェスティバルの会場にて
群馬県庁 1階ホール





南ドイツのフォークダンス
ドイツフェスティバル（県庁）にて

Heimat の既刊号から



年次総会
2008.4月（33号）



ドイツ音楽サロン in 軽井沢
2012.7月（40号）



【第7回「ドイツフェスティバル
in ぐんま」でのパネル展
『ベルツ博士とぐんま』
2017.7月（50号）

【Heimat 折々の既刊号の表紙から】

2013年7月3日
ハイマート
42号
発行所 鈴木 充昭
発行所 ぐんま日独協会
〒371-0105
群馬県群馬市東土見町石井2445-219
電話：027-299-4297
E-mail: info@jdgunma.jp
ホームページ: <http://www.jdgunma.jp/>



2011年4月後日協会員旅行と北軽井沢にて（後列中央の丸顔が故郷名会長）

| | |
|-----------------------------------|-------|
| 1. 会長あいさつ | 2 |
| 2. 故郷名会長 名会長の死を悼む | 2 |
| 2-1. 鈴木充昭 ぐんま日独協会会長 | 3 |
| 2-2. 木村敬三 全国日独協会連合会会長代行（元駐独大使） | 3 |
| 2-3. 橋本孝 ときどき日独協会会長（全国日独協会連合会副会長） | 4 |
| 3. 第5回ドイツフェスティバル in ぐんま | 5~6 |
| 3-1. 音楽コーナー | 5 |
| 3-2. パネル展示コーナー | 7 |
| 3-3. ドイツ人の目からみたドイツフェスティバル | 8~9 |
| 4. ドイツ人ケルップ先生の死を悼む | 10 |
| 5. デザイナー修行奮闘記（連載-2） | 11-12 |

2005年12月4日
ハイマート
31号
日本に於けるドイツを記念
ドイツフェスティバル
in ぐんま特集
発行所 平形 義人
発行所 ぐんま日独協会
〒371-0107
2010年12月4日発行 陸心堂印刷部
027279-22-049 Fax0279-24-6861



ドイツフェスティバル in ぐんまセレモニー
(2005年7月12日 群馬県庁大ホール)

| | | | |
|------------------------|----|------------------------|----|
| ■ハイマート31号 目次 | 頁 | ◆ドイツ人から見た | 頁 |
| ◎ドイツフェスティバル in ぐんま | 1 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 1 |
| ◎平形義人追悼特集 | 2 | ◎フランク・シュルツェン ドイツ大使館参事官 | 2 |
| ◎フランク・シュルツェン 平形 義人追悼特集 | 3 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 3 |
| ◎ドイツ大使館からの声 | 4 | ◎木村敬三 元駐独大使 | 4 |
| ◎ドイツの歴史と文化 | 5 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 5 |
| ◎音楽コーナー | 6 | ◎橋本孝 ときどき日独協会会長 | 6 |
| ◎音楽コーナー | 7 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 7 |
| ◎ドイツ人の目からみたドイツフェスティバル | 8 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 8 |
| ◎ドイツ人ケルップ先生の死を悼む | 9 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 9 |
| ◎デザイナー修行奮闘記 | 10 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 10 |
| ◎デザイナー修行奮闘記 | 11 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 11 |
| ◎デザイナー修行奮闘記 | 12 | ◎中津 弘之 群馬県知事 | 12 |

1998年 3月20日 発行
ハイマート
17号
発行所 平形 義人
発行所 ぐんま日独協会
〒371-0107 1998年3月20日発行 FAX027-250-4580



ぐんま日独協会クリスマス会の様子 平成9年12月7日 群馬会館地下食堂

| | |
|----------------------|-----|
| ■ハイマート17号の主な内容 | 頁 |
| ●公開講演 千原シズメライト交響を聴いて | 2 |
| ●ベルリン訪問報告本巻より | 3 |
| ●国際交流つづき 聴くクリスマス | 4 |
| ●会員のあゆみ(ドイツ)最新情報 | 5-6 |
| ●会員消息 菊しの案内 | 7-8 |

1994年 3月28日 発行
ハイマート
9号
設立6周年
会員特集号
発行所 平形 義人
発行所 ぐんま日独協会
〒371-0107
1994年3月28日発行 FAX027-250-4580



ぐんま日独協会クリスマス会の様子 平成5年12月5日 群馬会館地下食堂

| | |
|-----------------------|---|
| ■ハイマート9号の主な内容 | 頁 |
| ●ぐんま日独協会創立6周年大会のご案内 | 2 |
| ●ドイツ大使館・ベータンツポロワイヤー氏に | 3 |
| ●6周年記念講演会 | 4 |
| ●ケルップ先生とクリスマス会の思い出 | 5 |
| ●会員によるエッセー・話題文章などの投稿 | 6 |
| ●本の紹介 | 7 |

2020年12月15日
ハイマート
57号
発行所 鈴木 充昭
発行所 ぐんま日独協会
群馬県群馬市東土見町石井 2445-219
電話:027-299-4297
E-mail: info@jdgunma.jp
ホームページ: <http://www.jdgunma.jp/>



新しいホームページ 運営への協力感謝です

| | |
|-------------------------|----|
| 1. 会場のことば | 2 |
| 2. モンペイドイツ語の漢字変換表 | 3 |
| 3. クラウドの会場の紹介 | 4 |
| 4. 協賛体制 | 5 |
| 5. 津田三雄と私の出会い その2 | 6 |
| 6. 協会名義の出版(後編) | 8 |
| 7. デザイナー修行奮闘記(連載6) | 13 |
| 8. 広報担当の取り組み | 18 |
| 9. JG-Connect フェスに参加して | 19 |
| 10. 特集 ユリアン・シツカ女史の死去を悼む | 21 |
| 11. モンペイの報告 | 23 |
| 12. 編集後記 | 24 |

ぐんま日独協会
1989年3月1日
設立一周年を迎えて
平形 義人
ぐんま日独協会
群馬県群馬市東土見町石井2445-219
電話:027-299-4297

日独両国マンツク街道の姉妹結の調印式を終えて
中津 弘之 群馬県知事
平形 義人 ぐんま日独協会会長

合唱で日独親善交流を
群馬県立音楽院 合唱部
指揮 齊藤 民

ドイツの感動
副会長 須賀洋子大塚節
小林 善

題字：Heimat（筆記体）は初代会長の平形義人さんによります。

『ぐんま日独会報』として1989年に創刊されたぐんま日独協会の会報は、1991年11月6日発行の設立3周年記念大会号から『Heimat ハイマート』と名前が変わりました。

「Heimat ハイマート」の日本語訳は「故郷」。「会報がその名の如く親しみ易く且つ暖かく交流の場となり年配者には懐かしい思い出の場とし、若者には大志を抱いて郷門を出づる勇気を抜手歴する場として頂きたい」という思いをこめて命名したものです。

※ Heimat のバックナンバーは、ぐんま日独協会のホームページの「年誌と会報」で閲覧できます。現在、創刊号から第59号まで全ての号で内容ページを見ることが出来ます。

【入会案内】

原則として、群馬県内に居住・通勤・通学で、ドイツの政治・経済・文化・環境・観光等に興味・関心のある方

例えば

1. ドイツの文化・経済・環境・観光・スポーツ等を知りたい
2. ドイツに仕事・旅行（観光）等をしてみたい
3. ドイツ語を勉強したい
4. ドイツへ留学したい・駐在してみたい
5. ドイツが好き、交流・親善に関心がある
6. 日本に帰化又は留学・駐在したい（ドイツの方）

・・・入会には 「ドイツが好き」、「関心がある」、でしたら経験・資格等一切問いません・・・

会員へのサービス

1. ぐんま日独協会の各種事業の案内
2. 会報『Heimat』（年2回発行予定）の送付（Heimat：ハイマート、故郷）
3. ドイツ観光局発行の各種パンフレットの提供
4. ドイツに関する各種情報の提供
5. ドイツ語講座の開催

年会費（2022.4月現在）

| | |
|------|----------|
| 一般会員 | 3,000 円 |
| 家族会員 | 500 円 |
| 学生会員 | 1,000 円 |
| 法人会員 | 10,000 円 |

入会申し込み方法

本誌の巻末にある【問い合わせ先】のいずれかにご連絡下さい。

編集後記

1. 完成のお礼 Heimat 60号が出来ました。感無量です。会長を始めとし、会員各位の多大なるご協力のもと、貴重な玉稿をお送りいただきました。篤く御礼申し上げます。漸く日の目を見た次第です。

この間、編集担当の力不足から原稿執筆者にあれこれと注文を付け何度も書き直しをお願いしてご無理を申し上げたこともありました。その間に戴いた貴重なご意見は今後の作業に参考となること大なるものあり、と存ずる次第です。

2. 編集の経緯 ここに、60号の編集状況を振り返ってみることは次回の61号に向けて多少とも裨益するところがあるでしょう。

今回は60号という節目に当たるので、規模を拡大し、募集方法、形式などにも配慮しました。新たに工夫を盛り込み内容もスタイルも大きく転換することを試みたことから紙数が増えて編集作業への時間的制約と重なり、連載記事は已む無く次号に回すこととなりました。

この時期、次号61号がまもなく出てくることにもなり、原稿をまたもや集めることとなるのですが、投稿に際してはまず、規定の字数、形式、体裁に合わせる必要があることは論を待ちません。その上で皆様の原稿をお待ちする次第です。

3. ぐんま日独協会の会員増にはドイツ語を見せる・聴かせる 一般に文化団体にとって会員の急減少は最も恐ろしいことです。少子化に加え、うち続くコロナ禍で世間の多くの団体が消滅の危機にあるようです。とりわけ高齢者が主体の団体は苦しくなるばかりでしょう。

わがぐんま日独協会も用心するに越したことはありません。有効な対策としては、機会あるごとに、いや機会を無理に作ってでも、ドイツ語を人目に触れるようにする必要がある、と切に考えます。今回のHeimat60号も部外者に少しでも関心を持ってもらい、入会に近づきたい意図があります。

世間を見ると、ドイツ語を標榜する団体・人物なのに何かを説明するのに英語の表記のみで終わる例を多く見かけます。真に残念と言うほかありません。

恰も徒然草の、とある段を見るかのようです。＜僧侶と神官の兼業をしている人がいる＞のを兼好が見咎めるくだりがあります。生活のために仕方なくやっているのだ、という抗弁に対して兼好は、自分の本来の場面で、自分に酷似対抗している他者に扮することを良しとしない、という話のようでした。

ドイツの諺に、**Was ich nicht weiß, macht mich nicht heiß.** というのがあります。直訳では、**私が知らないところのもの、そのものは私を熱くしない。** 見知らぬものなど興味が湧かぬ。

或る分野が衰退するときは、私見によるところ、その分野の大ベテランたちが、そのワザを世間に実演して見せていないという現象が見られます。最近はどこでも詩吟を聞かず、ドイツ語を見ず・聴かず、と。しかし実演しないだけならまだマシです。残念ながら、詩吟団体の幹部が懇親会で洋楽演歌だけを唄い、ドイツ関係者が英語だけを喋り書く。大学が全学生に第二外国語を課さなくなって久しい。日本ではその頃あたりから、折悪しくインターネット（ハード・ソフト、運用法ともに英語の塊）の普及とも相まって、ドイツ語を肌を感じるものが激減しました。

4. Heimatにはまずドイツの近現代の概観を 近現代のドイツでは、理学、数学、工学、化学、薬学なども傑出しています。しかし日頃の「Heimat」の活動になかなかこれらは出て来ません。

文を書く、行事を打つという作業はどちらかと言えば文系の得意とするところでありますからどうしても文系が目立つわけです。そういえば、会社などを定年退職した人が生涯学習を目指すとき、理系の人でも文学書や俳句・短歌などを好むケースが多いと聞きます。逆の文系の人が理系の分野に転進するケースは寡聞にして知りません。それだけ文系の分野は魅力があるわけで、人間の根本に深く根差すものと言えるでしょう。芸術系に至ってはもちろん、それ以上により根源的であるわけです。

我が国では旧制高校の時代から人文主義に立ち、「外国語は文系の数学」と言われて来ました。文法を

重視し、訳読が中心でした。外国人を身近に一生見ることの無い時代の故であったでしょう。特に外国語会話・メールの習熟は有りませんでした。またこの標語はともすると、人は数学や理科を学ばなくとも英語やドイツ語・フランス語などをすればよいのだ、ということをも含意していました。ここでの外国語とは主にインド・ヨーロッパ語族の欧米人のものでした。

思い出されるのは、かつての大学入試に、受験指定科目数の多さで再困難といわれた北海道大学の理類のことです。5教科、11科目（国数英理社）（現国、古文、漢文、数Ⅰ、数ⅡB、数Ⅲ、英語、社会2科目（世界史、地理など）、理科2科目（物理、化学など））完全にゼネラリストの道を、特に理系学生において文系の学習も多く課し、総合的な理科人を目指そうとしていたことです。

現代の社会はかかる悠揚迫らざる道を許さず、幼少より一剣を磨いて頂点に立ち一点突破力に優れた即戦力となるものをヨシとする。それが今や世界の潮流です。

しかるに頂点を目指すことに過度に拘ると、その傾向は自動運動となって独り歩きし、あらゆるものについて世界の隅々までの序列化を促すものとなるものです。結果、たった一つの尺度でもって、点数の高い者がいればそれ以外の者は不要、という風潮を生みやすい。英語さえあればドイツ語は不要、との極論もこの延長上にある。（既になりつつある）それはもはや大きな誤りと言わねばなるまい。

5. ドイツに倣って Heimat に理系の雰囲気を増やす方針 ドイツ語・文化を愛好する我々にとって、我がぐんま日独協会も文学、音楽、歴史、地理、観光などの分野を開拓して成果をあげてきました。その功績には多大なものがあります。そしてそれはまた、これら以外の分野の人が新会員として入る余地が多分にあることも示唆しています。例えば、化学、物理、工学、医学、数学、情報などです。ドイツには文系に負けずに昔も今も理系の成果物は満ち溢れています。対して日本では理系関連のものごとはどうも不足がちです。そこで60号は表紙だけでも理系の逸話を扱ってみようと思いつきました。

6. Heimat に載る資格 しかし「Heimat」であるからにはそれが我が群馬県に繋がるものでなくてはならない。欲張るようだが、目に見えるもので、今も現存している何ものかであることが望ましい。しかも、ドイツと群馬県とを結ぶもの、それで理系的なものを Heimat60号に据えるということで、探した末に「関孝和」に着目しその紹介に努めたのです。これはまさにうってつけの題材といえ、これほど都合良く条件を満たす題材が群馬県にあった、というのも何やら不思議な縁を感じます。

そのせいでしょうか、今回の60号では、表紙はどうも理系に偏っているのではなかろうか？草津温泉は温泉医学、関孝和は和算数学、これはどうしたことか。そのように思われるかもしれません。

しかし実は、表紙に草津温泉の写真はあるが Heimat60号はそれの医学を詳述した内容ではない。同様に関孝和を扱ったけれども本文には数学を展開している片鱗もありません。表紙のドイツ人 Leibniz に至っては哲学史上の大陸合理論で单子論を唱えた人物で、政治家・外交官でもありました。

今回の表紙は「関孝和」を通じて和算という、世界に唯一の文化現象に触れました。しかし今回の Heimat60号を仔細に見れば別段、数学が登場しているのではなく、歴史文化の視点から触れたのにすぎないので、理系に偏っていると見るのは的外れです。理系化を、という初期の目的には不十分でした。

では表紙のもう一つの題材・『上毛かるた』はどうでしょうか。七十余年以上も昔から『上毛かるた』に＜和算の大家 関孝和＞の札があること、及び全ての群馬県民が6年間に亘ってその札を取り合い、覚えたことは壮大な偉業と言わねばなりません。詠み札／取り札の関孝和を目と耳と手を通じて数学に縁があった県民が単純な延べ数で800万人余もあった。先人の知恵が今になって更に光を放っています。

7. 終りに 前59号から今回の60号までの間に世界情勢は極度に大きく変化し不安が世界的に増大しました。時代は世界史的な一大転換点に差し掛かっているのではないのでしょうか。

世界史を3000年に亘って概観するとき、歴史に名を残してきた民族、国家、集団を見ると何によってその名が伝わったのか、そして現代の世界はどうなっていくのか、とニュースを見るたびに日々疑問が湧くところです。しかしそんな中でも会員の日々の活動を通じて「Heimat」は粛々と刊行してけるものと信じます。 **60号へのご協力、ご支援に重ねてお礼申し上げます。**

61号に向けて皆様の更なる原稿をお待ちしております。

（長井 宏之）

【Heimat 編集委員】

事務局長 平方 秋夫

執行理事 広報担当 ◎宮越 リカ 岡 博子 長井 宏之

『Heimat』 第60号 (2022) ぐんま日独協会会報 記念号
2022年(令和4年)9月9日発行
編集:発行 ぐんま日独協会

〒371-0105 群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

ぐんま日独協会事務局(鈴木方)

info@jdg-gunma.jp

© All Copyrights reserved

© Alle Urheberrechte vorbehalten

©無断転載禁止

1

問い合わせ先・参照先

ホームページ

<http://www.jdg-gunma.jp/> (会の様子、会則、活動状況等)

フェイスブック Facebook

<https://www.facebook.com/JDGGunma>

ツイッター Twitter

<https://twitter.com/JDGGunma>

インスタグラム Instagram

<https://www.instagram.com/JDGGunma?ref=badge>

電話・FAX

027-288-4297

QRコード



ホームページ



フェイスブック



インスタグラム



電話・FAX



ツイッター

Heimat Nr.60 Gedenkausgabe

September 2022

Inhalt

| | | |
|--|-----------------------------------|----|
| 【Editorial】 Zur 60. Ausgabe unserer “Heimat”: Iwakura-Mission und Austausch zwischen Japan und Deutschland | <i>Suzuki Katsuaki, Präsident</i> | 2 |
| 【Besuch des deutschen Botschafters in der Präfektur Gunma】 | | |
| Bericht über den Besuch des Botschafters | <i>Suzuki Katsuaki</i> | 3 |
| 【Kyouai-Projekt】 Bericht über das Kyouai-Projekt | <i>Oka Hiroko</i> | 9 |
| 【Erster Präsident der JDG Gunma : Doktor Hirakata Yoshito】 | | |
| Erinnerungen als Marinearzt | | 13 |
| Erinnerungen an Dr. Hirakata | <i>Suzuki Kiyo</i> | 14 |
| Erinnerungen an den Ehrenpräsidenten Hirakata | <i>Horiguchi Yasuyuki</i> | 15 |
| 【Städtepartnerschaft】 | | |
| Numata und Füssen | <i>Kanai Yasuo</i> | 16 |
| Erinnerungen an die 10-jährige Jubiläumsfeier der Städtepartnerschaft zwischen Numata und Füssen | <i>Kawada Masahiko, Masae</i> | 17 |
| 【Interessantes und Wissenswertes】 | | |
| Der große Mathematiker SEKI Takakazu und die drei größten Mathematiker der Welt | <i>Nagai Hiroyuki</i> | 18 |
| Ludwig II. und Richard Wagner | <i>Hirakata Akio</i> | 20 |
| Elementare Musik- und Bewegungserziehung vom deutschen Komponisten Carl Orff | <i>Uriu Kyoko</i> | 21 |
| 【Beiträge von unseren Mitgliedern】 | | 22 |
| 【Japanisch-Deutsche Gesellschaft Gunma, JDG Gunma】 | | 49 |
| Über uns | <i>Suzuki Katsuaki</i> | 49 |
| Geschichte | | 49 |
| Satzung | | 50 |
| Organisation | | 51 |
| Vorstand | | 52 |
| 2022~2023 (ab April 2022) | | 52 |
| 2020~2021 (ab April 2020) | | 52 |
| 【Unsere Aktivitäten in Bildern】 | | 53 |
| 【Aus den früheren Ausgaben der Heimat】 | | 57 |
| 【Mitglied werden】 | | 59 |
| 【Nachwort der Redaktion】 | <i>Nagai Hiroyuki</i> | 60 |
| 【Kontakt】 | | 62 |